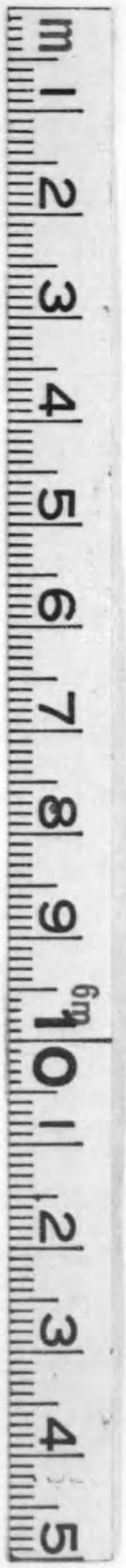


325
510



始



11-167

325-5/0

167



日蓮主義研究講話

大正僧
本多生日著

大正
n. 8 26
内交

東京中央出版社發行



序

人生の半は假面のみ、人は先づ過去の習慣に狂げられ、教育に壓せられ、法律に縛られ、道義に囚はれて、自己の性情を暴露する能はず、毀譽何かあらん我は我が言はんとする所を云ふ、榮辱何者ぞ、我は我が行はんと欲する所を行ふといふとも、それは限られたる範圍内のみ自由にして、一步その域を脱すれば、社會は直ちに其生存を傷く。其言行は必ずしも内心と一致せずと云はず、されど其の言行に現はるゝものは言行の一部にして、全面にあらず、忌憚なく全面を表現せんには現代は餘りに窮屈なり、否幾萬世の後と雖も社會存し共同生活の營まるゝ限り、内心と言行との間には廣狹の差なき能はず、唯具眼の士は其の言行の全部を比量し、推論し、揣摩し、臆断して、其人を知り得たりと

す。しかも覆れたるものは常に覆はれ包まれたるものは常に包まるゝに於ておや。

吾等日蓮聖人の教を奉じ、信を法華經に捧げたるもの、體は各相異れりと雖も心は則ち皆一ならざるべからず、然らば如何にして吾等の心を一にせん。謂へらく、「吾等は凡夫なり、凡夫なりと雖も而も佛性あり、此の性を磨きて以て如來に達すべし、凡夫たる吾等は求むる所、嫌ふ所、望む所、避くる所、皆相異なるが故に相争ひてやまず。如來たるべき吾等は理想を同うし、目的を同うして心常に一なるべきなり。日蓮聖人のたまはく、

本佛と云ふは凡夫なり、迹佛と云ふは佛なり。然ども迷悟の不同にして生佛異なるに依て、但體俱用の三身と云ふことをば衆生知らざるなり、さてこそ諸法と十界を擧げて實相とは説かれて候へ。實相と云ふは妙法蓮華經

の異名なり、諸法は蓮華經と云ふ事也。

と。夫れ釋尊は佛智によりて觀得したる所を開示せんとして世に出で給ひ、日蓮聖人は釋尊の本意を明にせんとして奮起し、妙法華を活用せられたり。吾等亦日用光中這の妙法華を活用せざるべからず。而も衆苦充滿せる此の三界の火宅に處る吾等は、今が正しく是れ妙法華活用のお秋なり。然り而して無上寶聚不求自得の大歡喜に心醉せん哉。

一言以て日蓮主義研究講話の序文となすものなり。

大正六年五月下浣

本田日生識

日蓮主義研究講話目次

□ 聖日蓮の思想

(一)	發端	一
(二)	法華思想は佛教の總府	一
(三)	法華經の宇宙觀	五
(四)	法華經の人生觀	九
(五)	法華經の佛法觀	二二
(六)	正義の精神と日蓮主義	二五
(七)	法華經主義の價值	二八
(八)	平和心と純眞の歡喜	三三
(九)	日蓮聖人の御人格	三五
(十)	娛樂と宗教	三九

□國民性と聖日蓮

- (一) 國民性の代表者たる所以……………三五
- (二) 我國民性と同化力……………三六
- (三) 國民性代表者としての日蓮……………四〇
- (四) 健闘的精神と日蓮主義……………四三
- (五) 須く實行の國民たれ……………四四

□聖日蓮の大志願

- (一) 豫願副力……………四九
- (二) 日蓮聖人の御主張……………五一
- (三) 理想は願の意無かるべからず……………五二
- (四) 佛教に於ける總願と別願……………五七
- (五) 再び聖人の大志願を論ず……………五八
- (六) 日蓮主義と統合的思想……………五九

□釋尊の精神と其布教法

- (七) 吾等の如何に力を副ふるべきか……………六八
- (八) 日蓮の主義者の使命……………七一
- (一) 釋尊太子時代の人生觀……………七三
- (二) 佛傳に依る太子の御出家……………七九
- (三) 車匿及乾渉との哀別……………八八
- (四) 宮中の狼狽……………九一
- (五) 修行時代……………九五
- (六) 阿羅邏迦仙の思想……………九八
- (七) 瀨婆沙羅王との對面……………一〇三
- (八) 降魔成道……………一〇六
- (九) 釋尊の布教法……………一一一
- (十) 釋尊布教法の長所……………一一五
- (十一) 時代に應ずるの布教……………一二〇

□神儒佛三教と日蓮主義

(一) 日本文明史の公平なる觀察…………… 一三三

(二) 國體と三教との關係…………… 一三七

(三) 文明史上に於ける佛教の功績…………… 一三〇

(四) 國家が佛教を棄てざる所以…………… 一三三

(五) 俗神道と純神道との區別…………… 一三五

(六) 三教と皇室干渉の尊嚴…………… 一四一

(七) 皇室尊嚴の偉力…………… 一四四

(八) 日本民族性の特色…………… 一四六

(九) 純神道の意義…………… 一四九

(十) 國家的生命と護國神…………… 一五二

□信仰と満足生活…………… 一五五

(一) 現代に於ける信仰…………… 一五五

□佛教と因果説

(一) 信仰の意義…………… 一五七

(二) 信は是れ大寶藏…………… 一六三

(三) 先づ信の根元に進め…………… 一六七

(四) 菩提樹下の法樂…………… 一六九

(五) 喜悅の力…………… 一七四

(六) 釋尊の説法の精神…………… 一七七

(七) 佛とは何ぞや…………… 一八一

(八) 佛滅後の信仰…………… 一八八

(九) 教法尊重の信仰…………… 一九四

(十) 本佛の信仰と満足生活…………… 一九七

□佛教と因果説…………… 二〇一

(一) 佛教宗派と其統一…………… 二〇一

(二) 佛教徒の信條…………… 二〇五

(三) 理教不二の修養…………… 二〇九

(四) 信心と善根……………三三

(五) 一般的善根及根本的善根……………三六

□一乗の歸趣……………三二

(一) 大乘教とは何ぞ……………三二

(二) 諸教は皆大乘教の末路……………三三

(三) 小乗教と大乘教……………三五

(四) 一乗教の信奉……………三三

(五) 一乗の意義……………三三

(六) 佛教と經濟思想……………三六

(七) 一乗の權威……………三四

□菩薩行の實行……………二四八

(一) 菩薩の意義……………二四八

(二) 信仰の力……………二五一

(三) 歸依三寶……………二五七

(四) 大威徳現成……………二六一

□讚佛偈に就て……………二六三

(一) 佛教の勢力……………二六三

(二) 佛教を信するに深淺の二あり……………二六七

(三) 涅槃經に於ける讚佛偈……………二六九

(四) 獅子吼菩薩の讚佛偈……………二七二

(五) 月上女經に於ける讚佛偈……………二七五

□附 録……………

聖愚問答鈔解説……………二七九

—(目次終)—

想 思 の 蓮 日 聖



日蓮主義研究講話

本 多 日 生 著

聖日蓮の思想

- (一) 發端……………
- (二) 法華思想は佛教の總府……………
- (三) 法華經の宇宙觀……………
- (四) 法華經の人生觀……………
- (五) 法華經の佛法觀……………
- (六) 正義の精神と日蓮主義……………
- (七) 法華經主義の價值……………
- (八) 平和心と純眞の歡喜……………
- (九) 日蓮聖人の御人格……………
- (一〇) 娛樂と宗教心……………

發 端

茲に日蓮主義を説明いたしまするに、謂ゆる日蓮聖人の思想の如何なるものであるかよりお話しねばならぬ。其處で此の日蓮主義とは元來どう云ふ思想か

ら来たものであるかと云ふに、云ふまでもなくそれは法華經に據るのである。而して此の法華の妙處、即ち法華經の卓越してゐる點を述べれば、其の名稱を數へるだけでも相當に時間がかかる位に、色々法華經には尊い點があるのである。

世人法華經の名を知つて居る者であつたならば、此經の貴いことを知らない者は無からうが、然し其の貴いと云ふ意味の多くは單に昔から貴い經として傳へられて居るからとか、或は唯だ何となく貴い様に思はれるからと云ふやうな漠然たるものであつて、其如何なる點が如何やうに貴いのであるかを明確に意識してゐる人は案外少ないやうである。

然らば法華經は如何なる點に於て如何やうに貴いのであるかと云ふに、これを知るには先づ法華經の眞義即ち根本精神の如何なるものであるかを知らな

ればならぬ。而して法華經の眞義を知るには自ら法華經を讀まなければならぬ。いことは云ふまでもない。

極く古い時分に印度に天親菩薩といふ有名な高僧が出られた。これは印度での大論士であるが、その法華經に關する意見を書かれたのが残つて居て（それは支那の方にも翻譯になつて居る）是が法華經に關する一番古い論書とも云ふべきである。其の法華經の中には、法華經の特色が十箇條數へてあつて、之を十無上と云ふのである。今日この十無上に就て研究を致しても、成程法華經には他の經の及ばぬ特色が多くあるといふことは分るのである。其の後天台智者大師が支那に出られ、この人は實に法華經ばかりの學者ではなく、一切經に亘つて佛敎を解釋せられた上に於ては、各宗を通じ、佛滅後三千年の歴史を通じて最も勝れて居ると云つて宜いのである。特別な意味に於ては勿論日蓮聖人が第一番で

あるが、佛教の大體を秩序よく説かれたものは智者大師の上越す者はないと云ふことは既に定評のある所である。此の智者大師が法華經の長所を數へられたのは、法華經の前の方に就て十箇條、後の方に就て十箇條、併せて二十箇條を擧げてある。

其の二十箇條とは何であるかと云ふと、所謂述門の十妙、本門の十妙で、更にそれをもう一つ徹底的に解釋する場合には觀心の十妙と云ふものがあつて、三十の妙所を數へられてある。

其の後妙樂大師が更に多少變つた方面から法經の二十の大事と云ふものを數へられた。之を妙樂の二十の大事と稱して是亦有名である。其の後日本に於て傳教大師が出て、又一家の法華經觀を發表せられて、十箇條の妙處を數へられた。即ち秀句十勝と云つて立派な書物になつて現存してゐる。

斯様な譯であるから法華の妙處と云ふやうなお話をするには、その名前を擧げるだけでも相當の時間を要する位なものである。又更に進んで言へば、謂ゆる天台の法華經は一々文々是真物なり………一文一句是れ皆眞の佛である。六萬九千三百八十四文字 悉く妙を以て決す………で、一字々に妙といふ字を附けて見なければならぬといふ位の解釋であるが、是は言顯はしやうがないから、それ程に言つて法華經の貴いことを示したのである。

二 法華思想は佛法の總府

今もつとも簡單に法華經の勝れた點を言現はしますれば、色々な偏寄つた思想を整へて、大きな思想を纏めて來るといふことが法華經の一大特色である。

是は偏寄つた思想を纏めると云ふが宜いか、或は浅い思想に深みを與へて統一すると云つた方が適當であるか、兎に角雜然たる人類史に現はれる思想と云ふものはまるで、悪いものではないけれども、偏頗であつたり、淺かつたり、拗く居つたり、隅の方に行つて居つたり、あらゆることが雜然として社會の上に現はれて居るところのその偏頗なものを直すべき所は直し、而して大きな眞圓い大思想の中に皆融合する、又思想の分裂といふものは淺いから分裂するのであつて、深く徹底すれば統一と云ふものが現はれるのであるから、淺い思想に深みを與へて統一するといふことも言へるが、畢竟さうした意味のことが一言にして云へば法華經の非常に尊い點である。其の容れると云ふのも少しばかりのことを容れるのではなくして、非常に大きな意味である。之を包容する場合に於て言へば、無論天地宇宙全體を容れて仕舞ふところのものであるから、

何ものと雖も法華經の大思想界に這入らないものはないのである。

又他の思想に這入らないでも法華經の思想は足りないものは無い、これに就て海の譬がある。百川が海に流れ込んでも海の水は殖えると云ふことはない、又旱天が續いて河の水がすっかり無くなつても海の水が減つたと云ふことはない。

それと同じく實に法華經は大海に於けるが如くにあらゆる思想を入れても、別に法華經の思想が膨脹したとか、或は思想が殖えたと云ふことはない、又外のもものが全部反對に立つても、法華經が涸れると云ふことはないと云ふが如くに豊富な思想を以つてゐるのである。

素人の方が見ると、法華經はそんなに言ふ程のこともないと御考の方も多し知れないが、それは他の佛敎を研究して見ない謂ゆる素人であつて、俄かに法

華經を見るから分らないのである。何故に分らぬかと云ふと、法華經は佛説の全體に就て實に深い所の結論が與へてある。裁判の言葉で言へば、判決主文といふやうなもので、詳細の説明は涅槃經あたりに譲つてある。故に一通り他の御經の間に現はれた思想を見、而して法華經を見ないと云ふと分らないのである、即ち細かい事は外に譲つてある、此の事は昔から智者大師も言つてゐる。法華經は大綱を存すと云ふ風で、法律で云ふたならば、憲法の箇條の如きものである。けれどもそれから現はれて來る活用に至つたならば、總ての法律の總ての活動は皆憲法に基くのである。然るに法律を研究しないものが憲法を見て是はどうだと云つた所が話にはならない、そこが法華經の思想を綜合した上に於て非常に尊い點なのである。

三 法華經の宇宙觀

然らば如何なるものがそこに集つてゐるかと云ふと、佛敎に現はれた問題といふものは、非常に數の多いものであつて、謂ゆる八萬四千の疑問に對して八萬四千の敎を説くといふ位であるから、細かい事を數ふれば無量である。けれどもそれには又纏め方があるのであつて、先づ昔の人の言葉で言へば、

第一 法界觀といふて天地宇宙を説明することに就ての思想である、是は色色の事は皆どうしても宇宙法と云ふものに接続するのであつて、道徳でも宇宙に接続しなければならぬから儒敎では之を天道なる語を云ふ。我國の國民道徳の淵源するのは神代にある。國を肇る宏遠と云ふ、即ち宏遠といふ非常に深い所へ這入らなければ道徳の淵源といふものはないのである。宗敎も亦斯の如く

で、その現はれてゐる教訓は日常の事であつても根底にはどうしても宇宙の本源を究めるところの説明を求めなければならぬ、所がそれが中々むづかしい、何れの御經に於ても宇宙は解釋を試みられた、華嚴經にも華嚴經の法界觀があり、大日經にも大日經の法界觀がある、また般若經にも般若經の法界觀がある、あるがそれには浅い所がある。偏寄つた所がある。此の浅い所に深みを與へ、偏寄つた所を直して一大宇宙觀を教へてある所のものが即ち法華經である。もとく宇宙は一つであるから幾つもあるべきものでない、完全な一個の宇宙觀が存すれば他の宗旨の宇宙觀も宜い、此の宗旨の宇宙觀は宜いと皆一緒に見て居ては間違ふ。一時に多くの存在を許して居るのが宗教分立の元である。それでは不可ない、葦のすゐから天に窺んで、葦のすゐから見える所も天上の一部分には違ひないけれども、それを全體と見るは誤りである。即ち法華經の

法界觀と云ふものは佛教の眞理である。それを簡單に言へば法華經の經文に現はれてゐる即ち諸法實相と云ふことである。諸法は宇宙に現はれてゐる總てである。其のすべての眞實の處を教へたものが即ち諸法實相である。それを他の言葉を以て言へば則ち妙法である、宇宙の諸法一切のものに何とも云へない玄妙な意味があることを茲に説き現はしたのである。それは非常に長いことになるが、兎に角法華經は諸法實相を説き、天地宇宙法界と云ふものに對して、有らゆる哲學なり、道德なり、宗教なり、人世觀なり、一切の吾々の思想の根底を爲すべき大原則の上の於て最も健全なる眞理を基礎として現はれて來て居るところの教である。世界の他の宗教を以て比較するも到底比較にも何もならない、法華經が宗教として卓越して居ると云ふことは、他の教との間に非常に段が附いてゐる。

四 法華經の人生觀

第二 即ちもう一つは人間自身を考へることであるが。人間自身と云ふものは如何なるものであるか、儒教で云へば人間と云ふものは天地の正氣を受けて現はれたものであると云ふやうなことを言つてゐる。敢へてそれは間違つたことではないけれども、意味は矢張り淺い。偏頗である。思想が充分徹底しないのである。又佛教の外の御經では、唯因縁に依つてのみ人間が出来たやうに解釋してゐる思想もある。因縁と云ふものは、人間が生れる所の或、一つの動機を與へるものであるけれども、もと／＼何もない所に因縁が存すると云ふことは出来ないものであるから、その前に主體があらねばならぬ。因縁を以て吾人を説明することは偏寄つた思想である。或は基督教で説くやうに大きな神があつ

て、さうして其の神が人間を造ると云ふやうなこともあまり道理には合はぬことである。然らば他の唯物論者、或は進化論者が言ふやうに吾々は極々劣等なものから自然法によつて進化したものであると考へたらどうか、是もどうも足らぬ點がある。同じやうに進化して來た人間の中に非常に思想の差異がある。どうも是は矢張り宿世の因縁と云ふことが手傳つてゐるやうに考へられる。どうしても吾々人間の眞當の事を考へるには、法華經の教に基いて、人間は如何にして存在するものであるかと云ふことを明にするのが、一番正しいやうに思はれるのである。併し只今は深い意味合の事のお話はしないけれども、法華經には實に一個の人間を説明する上に於て、何とも言へない尊い教が整ふて居るのである。而して先づ簡單にそれを言つて見れば、如何なるものでも尊い佛性と云ふものを皆有つてゐる。佛に成り得る性質を悉く有つて居る、佛になる性

質……佛は即ち完全なものであるから、中々表現はすことは出来ない、けれども先づ智慧の側に於ての完全、それから慈悲の側に於ての完全、活動の側に於ての完全、生命の上に於ての無限、憐れう云ふものは即ち佛を見るにどうしても無くてはならぬところのものである。

故に吾々の本體には今申す如き生命の無限と云ふもの、換言すれば滅びない生命といふものがある。その滅びない生命には無限の智慧がある、慈悲がある活動がある。それを導き出せば即ち佛の如き尊い圓滿なものに成り得る、さう云ふ強い意味を有つてゐる、さう云ふ大自覺を與へた所のは實に我が法華經である。何人でも法華經に觸るれば、己の身にある尊い光、尊い珠の光が發揮されて偉大なる活動を生ずるのである。法華經は己の身にある佛性の活動を促がして行くことを十分に教へたものである。それが非常に整頓して説かれて

あるのである。

五 法華經に依る佛法觀

第三 今一つは吾々が信ずる所の佛様の意味合である。これは宗教の全體に亘つてある所の信仰の對照となるものである。手を合せて拜む——大人格者を渴望する所に於て宗教はあるのであるから、其の絶對の大人格者を完全に説明することの出来るのが即ち法華經の偉大なる點である。

佛敎では華嚴に大きな佛が説いてある。大佛と云ふものは、華嚴經の理想から來たところのもので、華嚴經には佛の尊い意味が説明されてゐるけれども、未だ淺い所がある。偏頗な所があるのである。其の外の御經にしても佛に關する非常な理想が發表されてゐる、しかしながらそれ等が法華經の壽量品は

ど卓越したものは無いのである。日蓮聖人が心血を濺いで言はれたのは此の點である。一切經の中には

壽量品なくば天に日月、人に魂、國に大王、山河に珠の無からんが如きものである。佛敎の生命を失ふものである。

と云つてある。壽量品は所謂宗敎の絶對人格者を説明することに於て最も完全なる意味を示してゐるものである。是は若し東洋の文明として佛敎があるとするならば、法華經の壽量品に現はれたる宗敎の大人格者を説明する一の事柄に於て、有らゆる西洋の文明に比較して此の東洋の文明が遙かに卓越してゐると云ふことが言へると思ふ。

西洋人の殆んど全部が信仰を捧げてゐるところのゴット（神）——宗敎の絶對人格者と云ふものと、東洋人が信ずる所の此の法華經に現はれた絶對人格者

と云ふものと比較する時に、後者が數等勝つて居るのである。故に最後の世界の宗敎心を支配する上に於て、優勢なる地位に立つと云ふことは此の點に基くのであらうと思ふ。

他の者が幾ら偉くても其の宗敎の絶對人格者として信仰する本尊が力がなかつたならば駄目である。それが陳腐で、淺薄であつたならば駄目である。それは初めこそは宣敎師とか、僧侶とか、學者とか云ふ者の力の優劣であるけれども、最後の宗敎の優劣は本尊の力に歸着するのである。それが法華經に於ては最もよく現はれて何とも言へぬやうになつてゐる。

以上この三つが一切宗敎の根本であつて、此の天地宇宙を如何に見るか、吾の本體を如何に見るか、吾々の生命を如何に見るか、而して宗敎の本尊たるべき絶對人格者を如何に見るか云ふ、此の三つが完全でさへあつたならば、

その宗教は最も高尚なる宗教、完全なる宗教と云はなければならぬ。是が第一位である。外のものは第二位、第三位に属するのである。宗教の本體、本質はこの三つである。

六 正義と日蓮主義

此の三つを合せて昔から法華經では之を三妙法と稱してゐる、宇宙天體の法を世間法と云ひ、吾々の法を人法、佛法を佛法、三妙法なるが故に之を稱して妙法と云ふことになる。即ち宇宙についても妙法である。人に就ても妙法である。佛に就ても妙法である。更に全體の妙法を合せて妙法………南無妙法蓮華經と云つてゐるのである。

斯様なことは通常のこと、予が談ずるまでもなく法華宗の小僧でも皆知つ

て居ることであるが、今はたゞ此の三つが土臺になつて教と云ふものが起り、また此の教とは元來何を教へるものであるかを説明するのである。

即ち華嚴經があり、大日經があると雖も、畢竟それ等は何を説明して居るか、と云ふに、宇宙なり、吾人なり、佛なりの外はない、一切經に亘つて大日經は大日經のやうな意味に於て佛を説き大日經の意味に依て人間を解釋し、大日經の意味に依て宇宙を説明してゐるのである。色々と御經は違つて居るが、本質と云ふものは一つの物を説明して居るのである。

其處でこの三つのものに對して一番肝心な教が何處に現はれて居るか、と云へばそれが取りも直さず法華經と云ふ經典である。その經典に深遠な意味が籠つて居るので、天台智者大師、傳教大師等が前に解釋したのを、更に足らざるを補ひ、大發展を爲して日蓮聖人が御説明になられ、茲に法華經の深遠な意味が

發揮せられた次第である。

法華經の教と云ふものは前述の如く實に立派なものである。それに日蓮聖人の如き大人格者が現はれて、之を血と肉とを以て説明して、之に依て活躍した大宗教となつて現はれたのである。

更に此の教に基いてそこには實行と云ふものが生じて来る。教を教として置いた丈では何もならぬ。教は人心に大なる感化を與へて其の教の力の働きの實際となつて現はれて、横着な奴は活動するやうに、腰の抜けた奴には腰を立たすやうにするのが、宗教の人生社會を裨益する所以である。

宗教は大なる威力を以て居なければならぬ。それに觸れたならば直ちに人を動かすと云ふ力、なければならぬ。宗教はたゞ理屈が立派で、學者が議論して説明したななど云ふ左様な冷かなものではないのである。熱がなければならぬ。

ぬ。觸れれば弾きかへすと云ふ力がなければならぬ。此の點がまた法華經の貴いところでこれは昔から言ふてある。

一度法華經に接したならば誰しも動かぬ譯には不可ぬ。心のない草木さへも立つて舞はんとす……と云つた人があるが、法華經を讀めば實に精神なきものも自ら舞ひ踊らんとする位に感動力を有つて居るものである。又日蓮聖人御自身の御人格と云ひ、一代の仕事と云ひ、又遺された教訓と云ひ、何れも皆此の宗教の活力を有つて居るところのものである。御遺文を讀めば如何なる者でも精神に非常な刺戟を與へられる。御傳記を讀めばそれに依て感動を與へられる。勇氣なら勇氣を日蓮主義に依て鍛へれば、本當の強い勇氣が出て来る、正義の觀念なら正義の觀念を維持すると云ふ時に、日蓮主義に依てやつたならば、正義を維持すると云ふ上に少しも怯懦な精神がない、本當に仕上げると云

ふ力は日蓮主義にある。若しそれが本當に出来て居らぬものは、日蓮主義の教に接近することが詐りであるからである。遙かに日蓮主義を見て居るから出来上らぬのである、近寄つて見れば、日蓮主義に觸るれば、本當の力が生じ來なければならぬ。

七 法華經主義の價値

そこで日蓮主義の實行と云ふ力が法華經から起つて來る、昔の言葉で云へば修行といふ。修行と云ふと何か狹意味に解釋して、水を浴びて居るのが修行であるとか、或は石の上に座禪をして居るのが修行であるとかと考へるかも知れないが、そのみが修行ではない、水を浴びてゐる者が澤山出來ても、大し一それが國家を裨益する譯ではない。又石の上に座禪してもその人間一人は宜いが

それは唯一人だけのことである。外の人には何の益もない。道德と云ふものは自分一人善ければそれでよいと云ふものではない、己ばかり善ければよいと云ふことは小人の道德である。眞の道德は己を益すると同時に、國家に對し、人類に對し、宇宙に對して爲すべき事を爲さんとする事が本當の道德である。

我が日蓮主義の修行は即ち石の上の座禪ではない。また水を浴びたりしてゐるやうなものでもない。即ち大にしては立正安國を御唱へになつてゐる。國家の爲に力を盡し、一切衆生を濟度する爲に力を盡し、同胞の爲に盡し、近親の爲に盡して此の社會を健全にして行かうと云ふ所の菩薩界と云ふ所に這入るのである。

菩薩界と云ふことは、日本の人は大層難しさうに考へて居るけれども、是は間違つてゐると思ふ。儒教は君子の道を教へて居るが佛敎は菩薩の道を教へたも

のであるから、菩薩になつて行くのである。菩薩には完全な菩薩と一部分の菩薩と云ふものがあるが、兎に角尋常一年の菩薩でも菩薩に這入つたと云ふ自覺を法華行者は必ずもつて居る。念佛の信者などは斯う云ふ自覺がない。法華行者は必ず斯る自覺を求め、法華經と繋がると共に、一部の菩薩になると云ふことを理想としてゐる。然るに茲を餘り軽くするから、宗教が世道人心を頽廢せしめるとか、或は人類の向上を破却すると云ふことになる。

法華經主義は、菩薩の一部に這入ると云ふことを理想とするから、如何なる人でもそこに菩薩となれば、唯自分の事のみを考へて居ては菩薩と云はれないから、他の人々のこと、國の事と云ふやうなことに向つて、何かしなければならぬ。世の中に何か貢獻しやうと云ふ精神が出て來る、謂ゆる利他の精神である。

個人思想より去つて利他の精神に移つて行くところが法華行者の尊い所以である。今の佛教には法華經の感化が少し廢れた爲に、其の精神がないやうにもなつた所があるけれども、法華の信者と云ふものは法を思ひ、國を思ひ、どうかしやうと云ふところの精神、即ち護法心と云ふか、愛國心と云ふか、慈悲心と云ふか、菩薩の性を有する信者でなければならぬのである。何も知らぬ無學文盲な我利々々信者のやうに見えても、偉大なる愛國心、護法心、慈悲心と云ふ大道徳心を具へてゐる、これが實に日蓮聖人の感化であつたのである。今日のやうなのは、一つの變態の現象であると思ふ。

八 平和心と純眞の歡喜

前述の教と此の行ひと云ふものは共に大切である。此の教と行ひが先の三つ

のものに依て支配されて行くのであるから、宇宙の眞理に基いた所に己の安心があり、又佛を慕ふ所の信仰が出来る。そこから一つの實行と云ふものが促がされてゐる。

同一のことをするにしても、根底が深くないと云ふと、どうしても動かされ易い。吾々の一方には煩惱と云ふか物質慾と云ふか、一種の劣情と云ふものがあるから、唯即ち正しきを努めたら宜いではないか、忠實に元氣よく働いたら宜いではないかと云ふ、簡単な教訓では足らぬのである。假令吾々がすべての善事は之を行ふと思つて居ても、その決心は深く強くなかつたならば、それを犯すものが、自分の精神の中からも、社會の中からも盛んに起つて來るのである。謂ゆる千軍萬馬の中に奮闘すると云ふのには、強き決心と云ふものを持たねばならぬ。それにはどうしても一般の道德なり深い宗教なりに、本氣に這入つて

行かねばならぬ。即ち如上の意味に於て法華經は遺憾なく教が整ふて居るのである。

尙ほ其の外に法華經の信仰に今一點附加して置いて見たいと思ふのは、菩薩といふものは、いつも喜びに充ちて居るものである。之は予は軍人等に伺つて見たいと思ふが、軍人は道義の上に於て忠臣愛國の精神が基でなければならぬ。それから戰場へ出て戦ふ……謂ゆる決死果斷の精神が第二位のものであらうと思ふ。それ等と共に如何なる場合にも、精神の歡び、と云ふか畢竟精神の平和泰然自若と云ふことを失ふては、眞個の名將ではあるまいかと思ふのである。たゞ元氣よくやつて居るけれども、それは表面だけで以て腹の中には不満があり、どうもつまらぬと云ふやうな、感じがあつては何にもならぬ。まことに不自由な艱苦缺乏に堪へて、その艱苦缺乏に打ち勝つて、その打ち勝つと云

ふことに喜びを以て居らなければならぬと思ふ。

例へば一年二年籠城して、食ふものがなくても、茲に謂ゆる崇高なる道徳心が養はれて、忠義の爲に、『己は籠城してゐるのである』と云ふよろこびを維持することが出来たならば、それが立派な名將であると、予は信するのである。宗教が人を感化して行く上に於ては、如何なる境遇にあつても、如何なる迫害にあつても、其處には満足と云ふ、平和と云ふものを失はぬやうに、之を本格に修養しなければならぬ。また例へば身は車を輓く労働者でも、風が吹いて來る、砂が飛んで來る所で辨當飯を食ふ、さう云ふ時にも尙ほ且つ愉快を維持しやうと云ふのが、人間に一番むづかしい處である。それが砂が飛んで來やうが何であらうが、平氣で而も其處に愉快があるやうになれば、人生はもう成就したと云ふべきである。其の力を與へるのが宗教であると信する。高等なる道徳は

勿論その力を與へる、陸軍の方の軍隊精神の書いてあるのを見ると、欣然として國事に斃れるを喜ぶに至ると云ふことを以て、この軍人精神の完成したものとせられてゐる。この精神が非常に大切なところである。

九 日蓮聖人の御人格

實に我が日蓮主義は此の點をよく教へてゐるのであつて、日蓮聖人が首の座に坐つた時、將に首を斬られんとする時に方つて、傍の四條金吾に、

『是れほどの喜びを笑へかし』

と云はれてゐる。是は決して後代作つたものではない。日蓮聖人が確に言はれたのである。

又佐渡に流罪になつた時にも、雪の中に随分御不自由な生活をなされたので

あるが。その時斯く仰せられた。一つは大なる喜びである。一つは大なる歎きである………と、歎きとは何ぞ、日蓮に反對し、法華の行者を非難し、法華の眞理に反對するものは佛の罪を受けるであらう。是が一つの歎きである。一つの大なる喜びと云ふのは、自分が法の爲め國の爲に流されたと云ふことは、誠に仕合せである。自分の一身は法と國の爲に捧げたので、慙懣嬉しい事はない、斯様な愉快なことは無いと云つて、雪の中に喜びを以て月日を迎へられた。まこと昔から流された者は澤山あるけれども、日蓮程喜びを以て此の配所の月を眺めて居るものはないと思ふ。それが前後足掛四年（實は二年六ヶ月位であるが）に跨つてゐる。其の前後四年に亘つて佐渡に流されて居たにも拘らず、『過ぎし月日も程あらし』と云はれてゐる。此の刑場に於て月日が經つのを知らないと思ふ。是が宗教の完成したる信仰の力の賜ものであらうと思ふ。

而して斯の如き力と云ふものは、勿論日蓮聖人の人格が尊いから、さうなるのではあるけれども、是が矢張り法華經の教の力より生じて來るのである。阿彌陀經を信じて居つたのではあゝ云ふ力は出て來ない、唯法華經にのみさう云ふ意味があるのである。謂ゆる其の意味は法華經は信仰と云ふものと、清新なる娛樂と云ふものをもつとも能く調節してゐるのである。人間の喜びと云ふものを非常に大切にしている。有難い／＼と云つて信仰するが、有難い／＼云ふことは喜ぶ言葉である。信仰は即ち喜びである。故に法華經に於ては其の劈頭から法華經を見て居ると精神が非常に愉快になると云ふことが書いてある。悦可衆心と云ふことが方便品にもあるが、其の通り非常に善い心持ちである。

此の悦可と云ふ意義を申しますれば、兎に角善い心持のところに、非常な正

しいやうな意味の重つた所の所謂清新なる娯樂と云ふ意味で此の文字が使はれてゐる。換言すれば善い心持の中に更に善根を敷く非常な崇高な點があるのである。茲が宗教の尊い所以である。また法華經の尊い所以である。即ち法華經の全部を美と云ふものが貫いてゐる。

壽量品には、天人が常に伎樂を爲して居る光景が謳つてある。それは天人が鼓を有つて諸々の伎樂を爲すと云ふ、吾々の生活は天人が常に樂を奏して慰めてゐる如き生活であると常に斯う云つて喜んで居るのである。

一〇 娯樂と宗教心

是は唯の空論ではない、社會を救ふには常に清新なる娯樂と云ふものと、崇高なる信仰とを調節させねばならぬ。即ち娯樂と云ふものを宗教の方に引付け

なければならぬ。娯樂と云ふものを罪惡の方に取られたならば、宗教が如何に戦つても負けて仕舞ふ、芝居へ行くと歸りに銘酒屋へ寄る、それから吉原へ行く、恁う云ふ連中を救済しやうとするのには、それ以上の娯樂を此方が有つて居なければ駄目である。これは西洋の文明を見ても分る、人間の喜びの精神を高尙に導いて、宗教と接續する爲に、教會でやる音楽師は必ず第一流の音楽師と云ふことになつてゐる。劇場などでやるのは二流三流、教會でやるのは第一流である。ニコライあたりの音楽師は、ニコライ主教の直ぐ次の席を占めて居る音楽師である。教會では芝居などに聞く事の出来ない音楽をして、人心を喜びの中に向上せしむると云ふことを非常に尊んで居るのである。

吾々お互人間と云ふものは、誰しも善い心持で世の中を暮さなければ損があるといふやうに、朝起るから夜寝るまで一日中愉快に暮すことを心掛けて居

る。是は古來から達人名將の傳記を讀んで見ても、何等か愉快を求めるところがある。即ち自然の風光を愛するとか、音楽を聞くとか、何ものか一種嵩高な喜びと云ふものを維持して居るものであると思ふ。

同じ見るにしても眺めるにしても、上野の山を見て、『大變良いナ!』と云ふのでは駄目である。『實にどうも何とも云へない佳い景色だ』と能く味ふべきである。何事に對しても深刻に、本當の力を入れる習慣を附けなければならぬ。而して喜びと正義を結び付けると云ふ習慣を作らねばならぬ。殊に現在將來に對して人間を救ふに於ては、此の正義の信仰と云ふものと、喜びを結び付けなければならぬ。日蓮聖人がそれをお示しになられて居るのである。

國民性と日蓮

(一)國民性の代表者たる所以……(二)我が國民性と同化力……(三)國民性代表者としての日蓮……(四)健闘的精神と日蓮主義……(五)須く實行的國民たれ

一 國民性の代表者たる所以

日本の國民性の特長に就ては、種々なる方面から觀察して之を列擧することが出来らるであらうが、しかしながら、從來それ々と組織的に研究して、纏めて發表したものあるを未だ聞かない、予が今言はんとするところのそれも實は然りで、たゞ予を以て見たる一面の觀察に過ぎないかも知れぬ。兎に角、吾が國民性として、多くの學者、多くの人に依つて認めらるゝもの、少くとも五六はあらうと思ふ。今予はそれに就て吾が日蓮が如何に吾が國民性を代表せられ

たかを窺つて見たいと思ふが、元より日蓮聖人の御人格は、よく國民性を代表せられたによつて、(始めて其の偉大を致したとの意味ではない)偉大なる日蓮が、如何によく吾が國民性を表はされたかをお話して見やうと思ふ。

二 我が國民性と同化力

第一に擧ぐべき吾が國民性は同他方に富んで居ることである。ある人は、日本人には開國當初から固有なる、一種特別の思想……寧ろ外國を排斥するが如き所謂國粹なるものありと考へらるゝやうであるが、それは蓋大なる誤りである。全體太古に溯つて國民性の如何を考究するは、今日よりして殆んど不可能のことで、僅かに神話傳説によつてその幾分を窺ふことが出来るけれども、以て確たる國民性であると認むるといふことは、遺憾ながら有り得ないのであ

る。實に吾が國民の思想は、多くの歴史を経て印度支那の思想を輸入するに至つて著しく見るべきものがあるに至つたものと謂つて宜いので、たゞその間日本人には、印度思想を取つて印度化し去らず、支那思想を取つて支那化し去らず、却つて印度支那の思想を取つて之を日本化せしめると云ふ同化力を有してゐる。是れが即ち吾が國民性として、最も賞すべく、最も貴ぶべきものである。但し日本人中にも一部の頑迷なる輩は、同化力に乏しく絶對的に外國思想を排斥しやうとするものが古より無いではない。佛教傳來の當初、大連物部尾輿、守屋の如きは即ちそれである。

又この反對に一も二もなく外國思想に心酔して仕舞ふのも勿論よくはない。彼の聖徳太子の如きは稍々佛教に中毒せられた傾が無いわけでもないけれど

も、流石に國體を忘れて、全く外國思想に投入せられたものでは決してなかつた。大體に於て、健全なる日本國民には外國思想を峻拒せず、又心醉せず、よく同化力を鼓吹する特種性を有するのである。

此の特種性を有するが故に佛敎も日本に來れば日本の佛敎となり、儒敎も日本の儒敎となるので、外國思潮を容れたからとて、決して國體を傷けないのである。若し然らずして外國思想をそのままに鼓吹したならば、或は吾が團體として許すべからざる矛盾を生ずるであらうと思ふ。

例へば佛敎の平等主義の如く、若し之を極點まで上りつめたならば如何になるであらう、世は皆迷であるとか、畢竟善もなく惡もなしとか言ふ處を極端に主張したならば、結局破壊主義となりはしまいか。

又儒敎に於て、仁義忠孝をやかましく説いてゐるけれども、堯の天下を舜に

譲れる、舜の禹に譲れる、殷湯周武の臣にして君を討ち以て天下を取れる、皆以て仁を得たり道を得たりとしてゐる。即ち有徳作主義で、若し此の主義を發達せしめたならば、所謂民主主義となつて我が國是を矛盾するに至りはしまいかと疑はるゝのである。

又儒敎に於ては神に對する觀念は甚だ明かでない、これも神國として天照太神始め、多くの神々を尊崇し拜祀する我が國に於ては、矛盾なきを得ないであらうと思ふ。

即ち是等の矛盾は國民の同化力にとつて補填せられるのである。而して聖日蓮が、如何に發達したる同化力を以て如何によく國民性を代表せられたると云ふことを、予は今次に於て述べやうとするものである。

三 國民性代表者としての日蓮

御遺文(二二八五頁) 高橋入道御返事の中に、

日本國の王となる人は、天照太神の御魂の入りかはらせ給ふ王なり。先
生の十善戒の力といひ、いかでか國中の萬民の中には、かたぶくべき。
と仰せられ、明かに吾が國體の有徳作王主義に合はないと云ふことを示され
てゐる。

儒教は忠孝の道を説くが中に、比較的に孝を偏重して、萬民一致して、上御
一人の御爲に竭し奉るといふ忠の義に於ては、吾が團體に取つては甚だ足り
ない所がある。彼の忠臣孝子と稱せらるゝ小松内府の如きも、此の點に於て未
だ十分に國民性を現はし得なかつたものと云はざるを得ない。

聖日蓮に於ては斯う云はれて居る。

慈父、王敵とならば、父を棄て、王に盡すが、眞の奉公なり。

と、是れ正しく儒教に伴ふ同化力の足らない所を打破せられた御言葉ではあ
るまいかと思ふ。

佛教の悪平等に就ても、日蓮は絶對的に之を排斥せられた。全體佛教の教理
たるや高遠幽邃で眞の宗教と謂はれるけれども、實は初め汎神教であつたの
が、後墮落して多神教と成つてしまつてゐる。

元來宗教の思想は一絶對に歸すべきものであるのに、斯くては遂に何等統一
するところがないことになる、茲に於てか、日蓮は天に二日なく二王なきが如
く、一佛世尊の教理にも唯一絶對の統一無かるべからずとして、遺文(一九九五
頁に)

日本國に一切經わたれり、七千三百九十九卷なり、彼々の經々は皆法華經の眷屬なり、例せば、日本國の男女の數、四十九億九萬四千八百二十八人候へども、皆一人の國生の家人たるが如し。

と云はれた……此の日本國男女の數は甚だ變なものであるが、當時の計算法で恁麼ことを云つたものと見える……日蓮聖人は謂ゆる諸神佛世尊の中に、絶對の慈悲、絶對の活動、絶對の智光を取つて、此の法華一乘に歸し、以て絶對の統一點を定められたのである。

四 奮闘的精神と日蓮主義

尙聖人は、封建制度の吾が國體に違へること、武人跋扈の甚だ大義に外づれたことを忌憚なく痛言されてゐる。矢張り御遺文中の句に、

日本武士の中に、源平二家と稱して、王の門守の犬二匹候と云ふがある、又、

伊豆の國の民たる義時の下知に従ふが故に……
と言はれ、當時權威に誇る北條氏に對して斯くの如き痛棒を與へられた。更に激しく、

日本に國始まりてより、謀反人二十六人、二十五人目は頼朝、二十六人目は即ち義時なり。

と云はれたのを見ても、聖人が如何に正義の爲に權威を悞れず、國體を重んじ、大義を明かにせられたるか、推知せられる。是れ正しく眞個日本民族としての國民性を遺憾なく代表せられたものである。

今一つ吾が國民性をして擧ぐべきは、吾が國民の武勇に富めることである。

更に云へば奮闘的の國民たることである。

瑞西の革命史を繙いて感じたことであるが、奈傘翁が、

瑞西國を取るを得るは瑞西國民を一人残らず殺し盡したる 曉ならざるべからず。

と嘆じた。吾が日本も亦その通りで、謂ゆる負け嫌いといふ一種の性情を有すも國民、即ち頗る武勇に富んだ、奮闘的の國民である。而して聖日蓮が、如何に這般の國民性を代表したか、如何にその生涯を奮闘的に送られたかは、今更予の喟々を要する所ではない、實に眞の宗教家たるものは、一人にして萬人の敵中に突入し、之を斬り従へ凱歌を奏して歸るてふ、衝天の志氣なくてはならない。然るに古來、僧侶と云へば皆柔和忍辱なぞと、無暗に優さしくさへあれば宜いやうに思はれてゐる、頓と活氣がない、獨り日蓮は腰骨の至つて強い

大和民族の本面目を現はされたる眞の宗教家であつた。

實に聖人は當時四面反對攻撃の渦中に投じて、侃々として非とする所を斥け堂々として正とするところを主張し、遂に一步も退くことなく、終始よく奮闘を續けられた。蓋し國に文武兩道は車の兩輪の如く、偏廢すべからざると同じく、宗教に於ける攝受拆伏も亦鳥の兩翼の如く偏重あるべきではない。殊に優勢劣敗の競争益々激烈なる、現今の御代に於ては、吾人大に日蓮聖人の奮闘的であつたことを學ばねばならぬ。

五 須く實行的國民たれ

抑も現代憲法の中に於て、何が最も貴いか、それは實に言論の自由である。言論の自由、と云ふても他なく、謂ゆる拆伏主義である、全く社會に投じて偉

大なる効果を收め得ること、一に誠實なる信仰を抱き、天地を貫いて動かすてふ確乎たる言論によつて、始めて得らるゝのである。そこに宗教の光明は輝くのではないかと思ふ。

尚吾が國民性として言ふべきは、實行的國民であることである。或は煩瑣なる研究に堪へない國民であるとも云はれやうが、それが即ち長所で、論より證據、手取り早く之を實行する所が、確かに我が國民の特性である。予が曾て東北地方を巡教した際、汽車中の退屈のあまりに、いつか華胥郷に遊んだ、或る驛に着くと、恰も其の地に基督教の傳道があつたとかで、傳道師先生續々乗り込んで来た。予は素より彼等を見向きもしない。相變らず眠るが如く覺むるが如くにしてゐると、先生達さも苦々しげに、

『日本人はこれだからいけない、全くだらしが無い、無作法千萬である』

と散々毒舌を振つてゐる。そのうらに年若い婦人が乗り込むと、いやどうも先生達相好を崩し、口を極め手を盡して疑待を始めた。予は『は、謂ゆる博愛主義とはこゝだな』と敬服したことであつた。

博愛！

あゝ博愛とは寔に恣意のものであらうか、吾人は敢て言はん、博愛獨り歐米の専有ならんや、否な強きを挫き弱きを助け、義に依て命を抛つても憚らないと云ふ、眞の博愛主義は議論より實行を先きとせる吾が日本人によつて、最もよく實現せられるのである。

近頃日本の外交政策に拙なりとの聲を屢々耳にするが、予は竊に之れを悦んでゐる。何となれば歐米人の對外策略に巧なるは、偶々以て彼等の偽善的の臆底を表白する所以とも見るを得べく、吾之のこれに拙なるは偶々以て其の正直

にして妄りに詭謀を弄せざるに因ると見るを得べき意味があるからである。吾々は如何しても歐米人に就て、全然當にすべからざる所があるやうに思はざるを得ないのである。幸にして吾には日蓮の慈悲活動の實際的宗教のあるあり、之に遵據して論より實を行ひ、この複雑なる現時に處して、外國思潮に對する同化力を始め、其の他の國民性を益々鼓吹し、愈々發達せしめなければならぬ。要するに現代は囚はれたる舊慣の時代には非すと雖も、一方また舊慣は舊慣として一脉の露命を撃ぐべし、されど形式に眩惑して眞價を誤る盲目は避けねばならぬ。宗教の天地は自由である。

聖日蓮の大志願

- (一) 予願副力……(二) 日蓮聖人の御主張……(三) 理想は願の意無かるべからず……(四) 佛教に於ける總願と別願……(五) 再び聖人の大志願を論ず……(六) 日蓮主義と統合的思想……(七) 吾等如何に力を副ふるべきか……(八) 日蓮主義者の使命

一 予の願に力を副へよ

予願副力——これは日蓮聖人の御聖語の中にある御言葉である。即ち『曾谷抄』に出て居る御言葉で、以前の本では『録内二十五の卷』今の『遺文録千百十四頁』若しも忘れたら其處を見て貰へば宜いのである。

さてこの四字は何と讀むかと云ふと、予の願に力を副へよと——讀むので、是をお話すれば、予の願にといふのは日蓮聖人の大志願である。日蓮聖人が彼の偉大なる人格を以て、生命をかけて唱導せられし畢生の大志願を指すのであ

る、其の大志願に向つて——力を副へよ——と云はれたのは如何なることか、此の御文章は曾谷入道、太田金吾を通ふして、一般日蓮主義者にお示しになられた大切な御遺訓である。苟も日蓮主義の徒である以上は、聖人の生命をかけた御主張になられたこの大志願を忘れるといふことはあるべきことではない。その志願を繼承し、その志願を發揮するといふことは、日蓮主義者の根本思想であるべきは論ずるまでもないことである。

今茲に——力を副へよ——と云はれたことについて、私は大に意味があると思ふのである。由つて此聖語に基づき少しく所感を申上げて見たいと思ふ。

此の御文章の聯絡の處に、

此願若成崑崙山之玉鮮不レ求收レ藏大海寶珠不レ招在レ掌ニ

と仰せられてある寔に美しい志願である、崑崙山の玉鮮かに求めざるに藏に

收まり、大海の寶珠招かざるに掌に在らんと云ふ斯う云ふ尊とひ志願を、我々日蓮主義者は之を繼承し、之を發起する爲に努力してゐる次第である。

二 日蓮聖人の御主張

今日多くの人が寄ると觸はると、心あるも無きもおしなべて、『時局の問題と云ふやうなことを口に致すやうであるが、予の信する所では、時局に於て起る所の注意も、又平時に於て怠るべからざる注意も、大なる差がないと思ふのである。何故かと云ふと、それは時局と平時とに就て違ふことは僅かなことである。小さな點は違つても大なる事は違はない。動員令が下つて兵隊が汽車に乗つて立つ、何時龍口に着いて今何處まで進んで居るかと云ふやうなことは平時と違ふけれども、戦時に就て日本國民が新たに覺悟をしなければならぬと云

つて騒ぐことはない、今更騒ぐはそれは平生それ／＼の心懸が十分に届いて居ぬからである、大切な點に於ては戦時と平時と覺悟の差はない、予は大覺悟の前には差がないと云ふことを信するのである。夫は我々其の自覺は、即ち我々國民としては何處までも國家の實力を養成すると同時に、健全な思想を維持し、正義の觀念を發揮して行かなければならぬ。健全な思想正義の觀念と共に武力なり經濟なり、國民の實力を併せて進まして行かなければならぬ。

さればこの正義の思想を維持しやうとすると共に、武力なり經濟なり、國民の實力を發展せしめて行くことは、戦時と平時とに就て毫末も相違のあるべき事でない、即ち我が國民の永久の心得であると思ふのである。

戦争が始つた爲に騒ぎ出し、戦が終ると打忘れて仕舞ふと云ふやうなことは、頗る淺見者流のことである。少しく平和の曙光が現はれて平和會議でも開

けるといふと、武力を忘れて仕舞ひ、實力を忘れて仕舞ふのも、是れ又淺見者流のことである。

此の人類世界の實相といふものは、大觀すれば不變のものである。歴史を見れば少し位の變遷や違ひはあるけれども、此の人類の歴史の全章を達觀したる時には、謂ゆる世間相常住である、武力を要しないと思ふも極く僅かな時間、さう云ふてあるうちにも直ぐ戦争が起り、戦争が止めば一時平和論が起るが、又戦争が起つて武力を尊び、腕力を重んずる、此の平和と戦争とを繰り返してゐることそれが即ち人生の常態である、故に一時一時で動搖するは愚である。

此方の頭にどつしりした處がないから動搖するのである。それでは不可ぬ、戦時でも平時でも一貫して正義の精神と實力とを併行せしめ、正義を主として之に實力を伴ふて行くこと、この主意を教へられたが日蓮聖人の主張である。此

の正義と實力との併進併行を最も明白に根底より教へたのが日蓮主義である。時の都合で北風が吹けば南を向いてゐる、南風が吹けば北の方を向いて居るやうに、戦争があれば戦争熱に走り、平和になれば平和に酔ふと云ふは、之れ無定見の誹を免れぬ。斯様に吾々はフラ／＼して居るべきではない、その時々々の風に従ふのでは甚だ心細い、人類史を一貫してその實相を觀破し、その立場から考へたならば、戦時も平時も大覺悟の人に取つては差異はない。何も戦時の爲とか、平時の爲とか云ふ風に、別々に心得を教ふることはいらぬのである。

三 理想は願の意無かるべからず

日蓮聖人は法華經の智眼より起つて萬世不磨の明教を立てられたので我々は

この明教に歸依するのである。人類の歴史の一時の現象として、今日の戦争は如何なるか知らぬが、永久の觀察よりすれば、正義を忘れたり、實力を忘れたりする國家は亡びるに違ひない、人類の歴史を貫いて居る眞理は正義を格守する思想と、武力とか經濟とか國民の努力とか云ふ様な國家の實力を養ふことと、何時も兩々相伴うて行く國は榮え、然らざるものは、衰ふるに違ひない、一時的發作として正義と實力との重んずべきことを氣付いた位では駄目である、この自覺が一種の願と云ふものにならなければならぬ、願と云ふことは何であるか、今日の言葉で云へば理想に活力を加へて之を實現して行くことである。吾々は確實に正義と實力との併進を考へ、是非貫かうと云ふ強き決心を立つるのが願である、吹けば飛ぶやうな一時的の發作では駄目である。假令水火の中に投じて、或は如何なる迫害に遭ふても、生命を捨て實現を期すると云ふ

ことになれば、理想はこゝに始めて願と云ふ尊い力を有つのである。
其處で佛教に於ては願と云ふことを殊更に尊ぶのであつて、阿彌陀佛は四十八願、薬師如来は十二の願、御釋迦様には五百の大願があるといふ、即ち佛教に説いてゐる願と云ふは、却々容易のものではない、日蓮聖人は特に願と云ふことを屢々云はれてゐる。儒教の言葉で言へば志を立てると云ふことであるが、志と云へば少し弱いやうである。願と云へば志が熱して、ポカ／＼して居るところのものである。

佛教で云ふ願と云ふことは強固を意味し、日蓮聖人の御一代に於ては幾多の迫害に遭ふて益々強さを加へて居る、父母を殺すぞと云つても、此の願は捨つることは出来ぬ。國位を譲らんと云つても、この願は動かすことは出来ぬと仰せられて居る、この意味は聖人が平常に於ても仰しやつて居たのである。日本

國が皆な敵となつても、末法萬年の爲に此の大願を實現せなければならぬと……故に理想や志と云ふものは、願と云ふものになつてはじめて眞の光があるのである。

四 佛教に於ける總願と別願

佛教には總願、別願と云ふこともあるが、之を分かり易く云へば、總願は一切のことを總括したる根本思想であり、この大理想を實現する爲に部分々々の仕事がある。之を別願と云ふ。

更に之を國民に譬へて云ふなれば、國民には一心結合の大理想があつて、而して各自はこの大理想の爲に部分々々の職分に於て盡すが如き、即ち是れが總願、別願である。一切の佛様は統一した處の大誓願を有つて居らるゝ、日本の國民

すら、

億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟ス

のである、我が國民には一心結合の總願がある。佛陀に統一の誓願なくして、却つて人の前に醜を貽すやうなことをなすべきや、されば諸佛には總願のあるを知るべきである。菩薩の四弘誓願と稱して、一には生きとし活ける者を悉く濟度せんと誓ひ、二には絶對の眞理を覺らんと誓ひ、三には諸種の智慧を研ぎ。四には諸種の罪惡を斷するので、即ちこの四つの總願を立て、行くのである。文珠觀音等何れも皆この誓願を立てたところの菩薩であるが、此等の菩薩に比して卓越して居るのが、我が日本國に出て給ひし日蓮大菩薩である。日蓮聖人は本化上行菩薩の再誕であつて、即ち菩薩中の棟梁であらせらるる、觀世音菩薩は普門品にやさしい誓願を立てられ、又文珠菩薩は維摩經に哲

學的の誓願を立てられ、又地藏菩薩は地藏經に娑母のやうな願を立てられてゐる。何れも尊い誓願であるが、或は一方に偏し且又小さいやうである。

今此等の誓願では之を移して以て我日本國民の總願とするには足らない。蓋し我が日蓮聖人の大志願に至つては日本人全般の總願として申分のない立派な意義を示されてゐる。即ち最高最善の理想信仰と、萬邦無比の王法の威力とを冥合して、精神上物質上完全なる理想の文明を世界に建設せんとするのである。故に日蓮聖人の願は、即ち我々國民の取つて總願とすべき意義を有するものである。我々法華行者は他の國民に先だち、この大志願を翼賛し繼承し發起するので、如何にも光榮であり、又同時に責任も重大なるを感するのである。

法華行者のことを法華經の法師品には、
是人有大信力及志願力者善根力。

すなはち大信力と志願力と諸の善根力との三つが具つてゐると説かれてゐる。法華行者は信仰と同時に、其處に志願力があり、又諸の善を實行する力があると云ふので、寔にありがたい經文である。

五 再び聖人の大志願を論ず

其處で日蓮聖人の大志願は如何に示されてあるかといふに、『開月鈔』にある我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん、等とちかいし願やぶるべからず。

この聖語は之れ即ち聖人の大志願を表白せられた適文であらうと思ふ、日本の柱といふは、世界的でないから小さいやうの感じが起るけれども、聖人の報恩鈔を拜見するに、

『日本乃至一閻浮提』

とあつて、日本より行つて世界に及ぶの御主意なることは誠に分明である、即ち日本の柱と云はれたのは小さい様にも見えるが、實は此處に日蓮聖人特得の妙旨が包まれて居るのである。聖人は本化の大菩薩の再身であり。又只の人として見ても佛教精研の結果としては、一切衆生を投ふの慈悲博愛の御精神であらせらるゝは申すまでもないことである。其の大慈悲を有しながらに日本の柱と誓はれた所に、特得の大理想大主義が示されてゐるのである。即ち博愛に偏して忠愛の大節を忘るべきにあらざることを示されてゐるので、大慈悲の宗教家であつて日本の柱と誓はれたその所に妙味を識らねばならぬ。

此の博愛の精神と國家的觀念の融合調節は、特に必要を感じつゝあるの今日自今益々日蓮主義の光は輝を増す次第であらうとは予斯く信じて止まないも

〇〇〇〇〇〇
 のである。

今日は帝國主義とか世界主義とかの孰れかに偏して、未だ調節に迷へる人多きに比して、六百六十二年の昔時に於て、身佛門にありながら、斯くも明白にその志願を表白せられしことは、心ある者としては敬服讚歎せずには居られないのである。

明治天皇の御製に

萬つ民救はんみちも近きよりをして遠きにゆくよしもかな

大八洲みいつくしみのひろき世は波の千里もとなりなりけり

わがこゝろおよばぬ國のはてまでもよるひる神はまもりますらん

これ等の御聖旨を拜察致しますれば、國家を通して世界に及ぼすの思召であらせられ、前後秩序を重んじ、近きより遠きに及ぶの御聖旨であらせらるゝこ

とが寔に分明である。日蓮主義は能くこの御聖旨に契ふ事と信するのである。却説我が聖人が柱と云はれたところの意味は何であるか、是は思想界から起つて、日本の文明を飽迄高度に進めて理想の文明を作り、之を以て世界を教化せんとの大抱負である。然し他の宗教や道徳と異るところは、思想の文明は唯思想の文明ばかりで進めて行くことは出来ない、國家の威力を以て之を保證せられなければ、途中で挫折せられ破壊せられて仕舞ふものである、故に正法と國力を合して進み行くの御主意である。即ち三大秘法鈔に、

佛法王法に冥し王法佛法に合す

と仰せられてゐる。佛法とは精神の文明であり、王法は國家の威力である。この王法の威力に由つて保障せらるゝ精神的の文明の内容には、深遠なる宗教道徳を要するは論なき所である。この文明の内容を高等に進め豊富にして、列國を

して衷心より敬服せしむるまでに至らねばならぬ。それにはどうしても東洋在來の文明を保有し、更に西洋より輸入し來れる文明との調節を遂げ、而して之を成し遂ぐるには、根本に之を吞吐し開顯し得る、大なる理想、大なる主義、大なる指針がなくてはならぬ、ことに統一を標榜せる日蓮主義の力を要するのである。

我國は國家的組織としては、實に萬邦無比なるは今更申すまでもないが、思想の文明に就ては必ずしも日本固有のものゝみが完全とは云はれぬ。道德の細目に於ても、哲學の説明に於ても、宗教の教義に於ても、他から輸入せられたことは決して少なくない、併しながらこの幾多の異なる文明の内容を我が國の根本精神に同化せしめ、而してその神髓を活用するに至りては、實に我が國の靈力である。この國家的の威力と思想界の最高最善の文明とを、俱に尊重し發

揮して行くが日蓮主義である、故に聖人は我が國を稱讚して、

八萬の國にも超へたる國ぞかし

と仰せられたので、この一語に於ても我が國民を警醒するに足る力があると思ふのである。

六 日蓮主義と統合的思想

日蓮主義が王法の威力と合して世界に建設せんとする精神の文明は、我が國思想史の全系を結合歸一せる大主義であつて、即ち佛教の大教義に於ては宇宙の實相に妙法を基として、本佛の大慈悲に接合し、佛子の自覺に立ちて菩薩行を實行するものである。同時にたゞ神道の本義を奉戴して、我が國の使命たる天業恢弘天下光宅の大業を翼賛し、我が國家の超勝を信じて勤王の大義と一

心同體の民族精神を發揮するものであり、又之と俱に儒教聖賢の教を奉じて、仁義調節の大思想を體現し、博愛人道の仁を理想するも之を實現する爲に義を守つて進むことを教へ、而して仁と義とを調節せるものである。

近來の博愛主義を唱ふる者は多くは義を忘れ、又國家主義を説く者は仁を忘るゝ者が少くない、此等は何れも仁義の調節を理想せし我が國過去の文明を閉却したる退歩の思想と云ふべきである。

日蓮聖人が一切無生を救ふの大慈悲とは忠君愛國の大誠忠とを兼有し、而して我れ日本の柱とならんと宣言せられしは、其處に一種獨得の光輝を有する事が知らるゝのである。

日蓮主義は斯の如くに我が國思想史の全系に就て、能く之を統合歸一せしめ各々の長所を綜合的に發揮したる大主義であり、之を統一主義と稱して居るの

である。故にこの大理想を我が國家の威力を以て護持し、國家を通して世界に理想の文明を建設せんと努力する所のものである。之を日蓮聖人は三大秘法鈔に於て、

佛法王法に冥し王法佛法に合して、世界歸敬の中心道場を我が國に建立せ

んと發願せられたのである。

斯く思想上には高等なる文明を理想し、之を擁護する實力として王法の威力を民族の結合力とに信頼して進み行く、この國民的自覺を促すが聖人の大志願にして、之を『予と願と』を仰せられたのである思ふ、即ち法を知る國を思ふ大精神であらせらるゝのである。

七 吾等奈何に力を副ふべきか

さて『力を副へよ』との仰せは如何に心得ふべきかである、今陳ぶるが如き大志願に對し奉つて、我々が力を副へ奉るには、如何に心得、如何に活動すべきか、この大志願に力を副へ奉らんと決意を起すのみにても、最早や區々たる私心や片々たる情念は打拂はると思ふ。

そこで我々の心懸としては、第一に時代に後るゝ如き事があつてはならぬ。時代に置き去りにさるゝやうでは、到底この大志願を御助け申上ぐることは出来ぬのである。されば日蓮聖人の御門下は時代の推移に對し、怠らず的確なる觀察を下して、適應せる活動を起すことを寸時も忘れてはならぬと思ふ、聖語に迦葉の入定も時こそよけれ

と仰せられて居るが、迦葉尊者が釋尊の袈裟を奉持して、後の彌勒佛に傳へん爲に、靈鷲山に入定して俟つて居らるゝのは、その御志は尊いに違ひないが、時と事に依つて固陋の考は捨てねばならぬ。今の世は斯くの如くに佛法は紛亂し、又衰頹を極めて居るに、之を知らぬ顔をして、只後の佛に袈裟を傳へんと入定を持続せらるゝは、時を知らぬ固陋の所行ではあるまいかとの活釋である。又聖語に、

縱令千經萬論を習學するとも時機相違しぬれば驗しなし

と仰せられ、又

時を知るを大法師となす

と仰せられてあれば、我々が聖人の大志願に對して御力を副へ奉るには、第一に時代の推移を觀察して、適應せる活動を起すことを忘れてはならぬと思

ふ。

第二には一致結合の力を養ふ事である。即ち異體同心の遺訓を奉じ水魚の思を養ひ、團結精神を鞏固にするが、力を副へ奉るに就ても第二の心懸ではあるまいか。多少學說上に見解を異にする事はあらうとも、又利害の關係が一致せぬ點の存するとも、此の大志願の實現に對しては、何事も經重の差あるを知つて進まねばならぬ。縦令他の事に於て反對せし事ありとも、この大志願の下には潔く聯絡一致の行動を取るべきである、聖語に

設ひ日蓮惡人にて一言二言一年二年一劫二劫乃至百千萬億劫此等の聲聞を惡口罵詈し奉り、刀杖を加へまいらする色ありとも、法華經をだにも信仰したる行者ならばすて給ふべからず。

百千萬億劫の永き間の敵であつても、此の法華經の爲に盡す場合には、共に

手を携へて行くべきであることを、徹底的に教へ給ふた御遺訓である。『法華經をだにも信仰したる行者ならば捨て給ふべからず』相互に此の精神で協力して行かねばならぬ。日蓮主義者はこの絶對の志願に於て聯絡を有ち力を合せて、友軍の犠牲たるの覺悟を以て奮闘力戰すべきである。

八 日蓮主義者の使命

第三には日蓮主義は元氣旺盛でなければならぬ。日蓮聖人は一人なりしも彼の如き大勇を示し給ふた。假令國中みな敵にならうとも、毅然として獅子王の態度を持つて居られた。されば日蓮主義者は意氣旺盛であらねばならぬ。然るに今日は御門下の僧俗共にこの日蓮主義的の元氣に於ては、大に衰へて居ると思ふのである。此の意氣旺盛にして奮闘實行が伴はなければ、聖人の大志願に

力を副へ奉る事は出来ぬではないか、先帝の御製にもある通り、我々は旭の昇る時のやうに鮮やかな心で、快活なる精神を以て進まなければならぬ。

さしのぼる旭の如くさわやかにたまはしきはこゝろなりけり。

我々は常にさわやかな心を持つて意氣旺盛を心懸け、朝早く起きて南無妙法蓮華經を唱ふるには、旭日東天に昇る如き活快なる精神を養はねばならぬ。

さて聖人の大志願は要するに、日本の國力と大理想とを結合せしめ、左に法華經を執り右に劍を提げて堂々と進んで行く所の主義である。併しながら回教徒の如く坊さんが劍を持つのではない、日蓮主義に依つて陸海軍の將校も學者も實業家も國民が皆大覺悟を定めて堂々と進み行き、日は東より出て西を照らすが如くに大教化を世界に布く事を理想とするものである。理想と實力とを結合して進んで行く處を、天晴地明と稱するのである。

而して日蓮主義を奉ずる門下の僧俗は、力を副へ奉ることに於て遺漏なきを期し、實際の方法を研究して最善を盡さねばならぬ。夫には時代の推移を考へ、又區々たる事情を捨て、一致結合の力を養ひ、又剛健活達なる意氣を盛んにして、堂々として進んで行かなければならぬ。是が即ち日蓮聖人の「子の願に力を副へよ」との遺命に報ずる所以であると信ずるものである。

釋尊の精神と其布教法

- (一) 釋尊太子時代の人生觀……………(二) 佛傳による太子の御出家……………(三) 車匿及乾陟との哀別……………(四) 宮中の狼狽……………(五) 修行時代……………(六) 阿羅邏伽仙の思想……………(七) 彌婆沙羅王との對面……………(八) 降魔成道……………(九) 釋尊の布教法……………(一〇) 釋尊布教法の長所……………(一一) 時代に應ずるの布教

一 釋尊太子時代の人生觀

釋尊の時代は今を去る茫々三千年前であつて今その布教法と其の精神とを御紹介するに當つては、社會の狀態も今日の日本のそれとは非常に差異があらうが、しかし釋尊の布教があつたやうに有効で且つ功を奏するに早かつたことは偏へにその人格が非常に偉れて居たからであると思ふ。

それで先づその偉大なる精神を御紹介せんとするのには、即ち釋尊が出家せられる間際から御話せねばならぬ、豫ねて釋尊は未だ太子の頃、此の人生觀といふことに就て、人間の世の中のことを深くお考へになつて居られた。ある日のこと城の東の門から御散歩に出られると、途中で憐れな老人にお遭ひになつた。その老人の姿が如何にも哀れな姿でありまして、枯木のやうな體、曲つた腰、殆んど骨と皮ばかりのやうになつて、一步を運ぶのにも喘ぎ／＼歩いて居ると云つたやうに、極めて老衰した有様を御覽になつて、是はウカ／＼散歩な

どして居るべきではないと云つて宮中に引き返される。即ちこの態を見た釋尊は茲に於て深く人生觀を起したのである。

『あゝ云ふ風に老衰して氣力の衰へた有様になると云ふことは、人生に於て如何にも歎かはしい事である』

と云ふやうなことをお考へになつた。その後また一週間ほど經つてから、今度は南の門から散歩に出られた時に、婦人の病人にお遭ひになつた。體は瘠せて居るが腹は非常に膨れてゐる。さうして苦しき呻吟してゐる。それが殆んど行倒れ人見たやうなもので、はき溜のやうな處にころがつて居て、悲しい聲を出して何かを口の中で云つてゐる。太子は家來をして之を聞かした所が、それは自分の娘の名を呼んで居るのであつた、將に息を引き取らんとするやうな様子でありながら、娘の名を呼び、又夫の名を呼び、非常に悲しい聲を出して居る。

あゝ病人、太子は人間に病氣の免れ得ぬと云ふことは兼て聞いて知つてゐる。然るに今始めて病者なるものを見るに、その慘憺たる有様は到底見るに忍び能はざる所のものである。而して恐るべきこの病魔は獨り彼の女の上にある許りでなく、何時我が宮殿の中、否我が身自分の上に襲ひ來るかも計り難い、寔に人間は一度この病魔に襲はれる時には、桃李の花の装にも、天人の五衰の如く凋れ砕け、歡樂も、榮耀も、榮耀も、富貴も嵐の前の虹の如くに消え去つて仕舞ふ、今更ながら人生の果敢なさを思ふの念は更に太子を動かしたのである。而して太子は又引返して仕舞はれた。

それから後太子は西の門から出られた時に、愈々死人に出會はれた。是は葬式であるから死人と云つても棺桶に入れて擔いで行く所を御覽になつたのである。それは貧乏人の葬式であつたと見えて、相當に飾り立てゝは居るが、そ

の附いて行く親族が何れも泣き悲しんで、憂の色が有り〜と見える。茲に於ても太子はこの死の如何に悲惨なものであるかを考へずには居られなかつた。死は人より凡ての物を奪ひ去るのである。死は凡ての愛し合つたるものを永久に分つ時である。而して人間たる以上は是非共一度は死の見舞を受けなければならぬ。人間は生れると等しく死刑の宣告を受けてゐるのである。假令王侯の富を擅にすることが出来るにもせよ、それが死刑の宣告を受けてゐるものに何の楽しいことがあらう。太子は非常にそれを感じられて三度宮城へ引返された。

さて又ある日此の度は北の門から外遊せられた時に、今度は沙門、即ち出家沙門に出會はれた。この出家沙門と云ふのは、釋尊が創められた譯ではない、印度にはその前から宗教家があつた。その異様な出家が行く姿を御覽になつて、従者

に彼は何をする者かと云ふ事を問はれた時に、従者は次の答をなした。即ち
 『彼は世の中に善行善徳を積んで、人々に本當の安心を與へる者である。無
 畏を與へる者で、世の中に心配しないやうに、精神の安心立命を與へて行く
 者である』

と云ふことを聽かれたのである。而して太子は彼の出家の瓢々として流るゝ
 が如く群集の中に没して行くその影をいつまでも見守り、彼の何者にも囚はれ
 ざる如き自由の姿、實に快心の姿を思ふたのである。凡ての愛着を放ち、繫類
 をすて、天上天下自由の身となり、思ふがまゝに眞理の探求を續けたならば如
 何に愉快であらう——太子は急いで宮城に還られて、父淨飯王のお庭の閻浮樹
 と云ふ樹の下に行つて更に生老病死や世の無情を深く考へて居られた。その時
 に既に太子の悟りの一部分と云ふものは、そこに現はれるのである。

二 佛傳による太子の御出家

更に太子は即ち痛切に斯の如きの考を深めたのである。此の人生の頼み少
 なき事と、それから人間の理想と云ふものは、唯この人生の裏面に現はれるた
 る所に置くべきものではない、即ち此の移り變つて行く根據のない物質的生
 活に精神を置くものでない、若しも其處に置いたならば、生涯苦しみを打切る
 事は出来ない、故に先づ以て囚はれたる精神を擲たなければならぬと云ふこと
 を深く考へられた。

これは宛も諦めと云ふやうな意味であるが、捨覺と云ふ文字で現はされて居
 るのであつて、人間の精神が色々な事に捉はれないやうにしなければならぬ。
 斯くしない限りは人生は非常に苦痛なものである。たゞ物質的の慾望を辿つて

行くならば、火を以て焼かれるやうな苦みに陥る。此の人生は謂ゆる火宅と云ふ事になるであらうと云ふことを考へられた。中々悉達太子の決心は強いものであつて、人生の生老病死と云ふことが問題である。また誰しも人間は必ずこの人生に於ける苦海を渡らねばならぬのである、佛教の根本思想は實に茲にあるのであつて、生死解脱と云ふことは、永久佛教と離れることの出来ないものである。佛教の本旨はどうしても生死を解脱すると云ふことである。

太子御年二十九歳の時、段々とその思想が昂まり惱まされて、愈々今夜は此の宮城を出て、自分は専心修行をしたいものであるとの決心をなされた。其の時に太子の胸には偉大なる宗教が起つてゐる。以て萬世を導くに足るべき宗教が、その出家しやうと決心せられた心に燃え光つて居ると思ふ。佛本行集經にはその時のことを如何に説いてあるかと云ふに、太子は其の時もはや人の寢

静つた頃、一人屋外に出て、此の廣い虚空を見て居られた、さうして宇宙を考へ、人生を考へて、而して中々自分の力では偉大なる悟りと云ふやうな事は得られまいが、今は誠に天地静つて、有らゆる宇宙に在る所の偉大なる力は此處に輝きわたつて居る——他の言葉を以て言へば、諸天善神は皆悉達太子の進み行く無上菩提を成就せしめんとする光明に向つて、助けを與ふべくお集りになつて居ると考へて居られる。自分の力が若し足らぬならば、それ等の諸天善神は、天に居らるる神にも、地に居らるる神にも、如何なるものも、皆我が善き精神を助けて、而して自分の無上菩提を成就する事を満足せしめられたい、最早や自分の精神は極つたからどうしても今夜を過さしてはならないと云ふので、そこで太子は自分の平生愛して居られる別當の車匿と云ふのを呼び出されたのである。

此の車匿の語が寔に愉快である。未だ年若いのであるからして、釋尊と同じ日に生れたと云ふから矢張り二十九歳である。誠に忠僕であつて、太子は平生から愛して居られた。其の車匿を呼出されて

「我は今夜汝に言ふことがあるが、どう云ふことを云はふとも、我が言ふ事に背いてはならぬぞ」

と先づ以て宣言せられた。そこで車匿は、

「假令如何様なことでも君の仰せに背くやうな事はござりませぬ」

「それでは宜しい、日頃我が愛して居る所の名馬乾陟を曳き來れ」

と云ふことを命せられた。さうして其の馬を嘶かしては可かぬ。馬が大きな聲で嘶くと外の者が起て來るから、嘶かさぬ様にして、連れて來いと命せられた。

またこの時のことを神秘的の説には此の馬が非常に嘆いて、聲を出して嘶いたとも云ふてある。また天の神の助けによつて、外の人は眼を覺ますことなぐ、又門番もさう云ふ風に眠つて居つて、門の扉がギーツと開いたけれども眼が覺めなかつたと云ふやうな事もある、しかしさう云ふ事は後に理想化して來たものであらうと思はれる。即ち『馬を嘶かしては可かぬ』と云はれた方が事實のやうに思はれる。

車匿が馬を引連れて來ると、太子は喜んで、乾陟に乗られて、直ちに裏門から忍び出られたのである。無論門番は居たに違ひないのであらうが、それが居睡つて居るのを見すかして門を開けて出られたのである。

それから段々馬脚を早めて行かれると、車匿が氣が附いて、是は尋常の事ではない、此の夜中に城を出られると云ふのはどう云ふ考であらうか、平生淨

飯王から仰せ付けられて居つたが、太子が人知れず宮城を出る事があるかも知れぬから、その時分には諫めなければならぬと云ふことを命せられて居つたが是は今夜の事であらう。一通りはお諫め申さねば御父淨飯王に對して相濟まぬと思つて、

『今夜はこれからどちらにお出でになられますか』

と云ふた所が、悉達太子は、

『別に何處に行くと云ふ譯ではない、我は勝處を求む。』

『勝れた處とは何處でありますか』

『勝れた處と云ふて別に今は何處と云ふ方角が分らぬ、けれども此の城の中ではない、此の城の中には勝れた處がない、此の城の外に於て、此の世界の最も勝れた場所を發見しなければならぬ、——自分の精神に阿耨多羅三

貌三菩提と稱する菩提を得んが爲に行くのである』

と答へられた。所が車匿が言ふには、

『伽毘羅城は誠に善い處で、即ち勝地で御座います、然るに之を捨て、他に勝地を求められるのは如何云ふ譯でありますか』

太子の言はるゝに、

『それは一通り伽毘羅城は勝地であらう、けれども俺が言ふ勝地は意味が違ふ、此の伽毘羅城の内に居れば、生老病死と云ふ苦みを免れると云ふならば、俺は此の城は出ない、伽毘羅城が如何に立派であらうとも、矢張り此の内に於ては生老病死の四苦と云ふものは遠慮なく襲ふて來るのである。又其の外愛別離の悲しみ、或は怨憎會の悲しみ等の淺猿しい人生の苦みと云ふものは、遠慮なく伽毘羅城内を侵すであらう、若しもさも無くして、

伽毘羅城内だけは、それ等の苦みは襲ふて来ないと云ふことであるならば、何を好んで城を去るやうなことをしやう、決して俺は城を出ないのである。けれども伽毘羅城の内が決して境界眞實であると云ふことは言へまい、實在不滅の場所ではあるまい、唯人生の中に、少しく城を立派にし、城を立派にし、建物を立派にして居るだけであつて、何も違ふものはない、伽毘羅城内決して境界眞實と云ふことは言へまい、であるから俺は今夜城を出るのであるから、善車匿よ、我が心に違ふことなかれ。』

と云はれた。それで最早や車匿は止めることも出来ず、お伴申して行つたのである。それから太子は愛馬乾陟に對して、道行きながら之を褒められた言葉がある。

『汝は戦があつたならば、命懸けで死力を致して決して他に劣る事のない

名馬である。その勇氣を以て今日俺が進み行く此の行を助けてくれ、汝は戦に行くのであつたならば勇み立つが、夜中に暗い道を忍び足で行くのであるから、何事と思ふであらうけれども、俺の心の中には百萬の敵軍と戦闘を開くよりも尙大きな希望を以て進むのであるから、善乾陟よ、勇んで進んで呉れ、汝が戦の爲に力を出すと云ふ考を以て、之を法の爲に力を出すと云ふことに今夜は一つ考へ直してくれ、その代りに俺が阿耨多羅三藐三菩提を成就した曉には、大功德を以て汝を救ふてやる、故に今夜は汝の勇猛筋を出して其の強い脚を疾く行け、疾行せよ。』

斯う云ふ風に優しい誠心の籠めた言葉を以て頭を撫で、云はれたのであるから、乾陟も確かにその事を感じてか、勇みに勇んで進んだものであらうと思ふ而して此の夜大分長い間道を歩んだのである。日本の里數にして六町一里にし

て云ひますると、百里であるから六百町の道を（我里數で十六七里）夜明まで駈けて行かれたのである。

三 車匿及乾陟との哀別

さて夜の明け方に小さな山の麓にある彌尼迦と云ふ村に着いた。さう憊うするうちに夜も全く明けたので、其處に住んで居る婆羅門の僧侶で跋迦婆仙と云ふ有名な仙人を太子は訪ねて行かれた。この仙人は當時印度に於ける有數な大宗教家で、一名苦行仙と云つて難行苦行をやる仙人である。其の前に太子は車匿と乾陟に別れを告げられるのであるが、是は餘程悲しい一段である。

太子は馬から下りて優しい言葉を以て先づ車匿に諭して言はれるには、

『御苦勞であつた。世の中には他人の家に奉公をして居つても、眞心を以て

仕へない者は多い。又眞心を以て仕へる者でも氣の利かない人間は心ばかり眞心でも間に合はぬ者である。然るに汝は眞心を以て而かも能く間に合ふ誠に良い僕であつた。併し今度は汝と別れなければならぬ。今日は遠方まで送つて来てくれて定めし疲れたであらうけれども、併し父の王が待つて居られるであらうから、早くこの乾陟を連れて歸つて呉れ。俺は此處に止まつて何をするかと云へば、何もする事はない。即ち菩提を成就すると云ふ大きな目的に向つて進むのであるから、是からは馬に乗る必要もないし乾陟を牽いて王宮へ歸つて呉れ』

と云はれた、それから愛馬の乾陟に向つて言はれるには、

『汝は能く其の役目を勤めて呉れた。是までは毎日／＼俺は汝の背に乗つて無間に遠乗をしたり、夏の暑い日に汗を掻いてゐるのにも構はず乗り廻は

したり随分重い目をさせた。けれどももう再び汝の背には乗らぬ。今までは悉達太子と稱せられて、國王の後嗣であつたから、汝に乗つて意氣堂々と城内を乗り廻はしたけれども、俺はもう今日出家をしてさう云ふ世間の權勢とは離れたのであるから、再び汝の背に乗つて威風堂々と城内を廻るやうな事はないのである。汝の役目は今日にして終つたのであるから其の代りに汝は是から伽毘羅城に於て、命のある限りは別に何をしないで宜いから、安らかに一生を送つてくれ、今別れに臨んで何もそんなに悲しうな顔をするのではない、俺は此處へ何ものたれ死に來たのではない。非常に大きな目的があつて、即ち阿耨多羅三藐三菩提と云ふ廣大な悟りを開く爲に來たのだ、間違なく俺は悟りを成就する決心を有つて居るのである。而してその悟りを得たならば、汝にも分ち與へることがあるから、汝

は安心して歸るが宜い』

と云ふことを言はれた。それから非常に乾陟が悲しい聲を出して嘶いたと云ふことが御經には詳しく出て居る。茲に主従は遂に悲しい別れを告げた。其處で悉達太子は初めてそこに沙門の姿になるべく袈裟衣を着けられた。是は誰を師匠と頼まれた譯でもないけれども、出家の形に改められたのである。而してこの袈裟衣を着る時に更に強い決心を定められたのである。

四 宮中の狼狽

一方迦毘羅城に於ては、翌朝になつて見た所が太子が居られないと云ふので太子の妃である耶輸多羅女を始め嬌曇彌（是は母に成代つて釋尊を養育なさつた叔母である）それから父の淨飯王は勿論、其の外太子に附いて居つた多くの者。及び

りはしまいか、又日々立派な御風呂にお這入りになつた(印度では體に色々香水を塗るとか油を塗ると云ふ風習がある) さうして且つ身に色々なものを塗つて御出でになつたのが最早や再び風呂に這入る事も出来ないものである。今までは太子の身分であられたのが、苦行仙の處に於て生活なさると云ふのは如何にも忍びない、それは志を抱いて城を出られる事は止むを得ないけれども其儘にして置く事は出来ないから、種々の物を送つてどうか生活の餘り激しく變化しないやうに致したい。』

と云ふのでありますが、車匿が言ひつかつて来て居つて、何物もさう云ふ物を送つても受けぬからと云ふことを言つて居るのである。そこで先きに申した通り、食物が非常に粗末であると云ふこと、或は家の無い露地に寝られること、又今までは多勢の召使があつたのに、誰も御給仕する者もなく、自分で水

を汲み、自分で飯を炊くと云ふ生活の變化は、如何にも忍びないと云つて、嬌曇彌夫人が悲しんで泣いて居られるのである。而してそれが殆んど悶絶して、息も絶えるやうな觀があつたのである。

五 修行時代

されど釋尊に於ては非常な決心をして居られるのであるから、假令彌尼迦の跋迦婆仙の處へ行つたとしても其塵事は少しも苦しいとも思はない、此の身體が粉微塵になつても構はないと云ふ位の考である。それで外の多くの婆羅門の僧が寄つて来て、色々なことを尋ねるけれども、釋尊は平凡ながら、た宗教家とは違ふから、何事も仰しやらない。それから釋迦牟尼と云ふ言葉が出てゐる。釋迦は姓であるが、牟尼とは梵語で、譯すると寂黙と云ふ、牟尼とは詰らぬ

ことを仰しやらぬと云ふ意味である。そこで外の婆羅門が、

『どうもあの人は容易にものを言はない、しかしながら道を歩いて御座る時の光景と云ふものは、非常に立派な堂々たるものである。一つも話をせぬけれども、何處かに偉らさうな處がある。』

と噂もとりにある。それはその筈である。後世三千年の歴史に、地球上の人類に大影響を興へる位の宗教を作るその人の精神が形に現はれて居るのであるから、外のガラクタ宗教家には物を言はぬけれども、此の人は尋常の人ではないと思つたのは當然なことである、そこで何か心に考へてゐることを聞いて見たいと云つて、話に行くけれども、少しも相手にしない、併し太子も跋迦婆仙人の意見だけは十分に確めなければならぬからと云ふので、その意見をお訊きになつたのである。所が色々議論もしたが、要するに跋迦婆仙は第一に斷食

をやれと云ふ、先づ少くとも三週間位は物を食はずに行をしると云ふ。それから次いで説法を聴かされ、その説法とは何であるかと云ふと、大に肉體を苦しめると云ふ。我は腕の上で蠟燭をとぼすとか、或は掌に油を注いで、燈心で火をとぼすとか、或は體を岩に投げつけると云ふやうな難行苦行自分の身を苦しめる行を勧める。併し釋尊は恚う云ふ苦行と云ふことに同意しなかつた。是は小乗でも同意して居らぬ。釋尊が苦行をしたのは斯う云ふ馬鹿々々しい苦行をしたのではない。

因ニ斷食ニ當レ得レ福者、野獸等ニ應レ得ニ大福

とお經にも出て居つて、斷食してそれが功德になつて幸が得られると云ふ事ならば、野山に住んでゐる狐や狸は、雪が降つて食物が無いと云ふと斷食することは、人間が一週間やそこらやるどころではない、随分長い間干乾のやうな

目に遭ふ野獸が澤山ある。それらが一番大きな福を得なければならぬではないかと云ふことを以て、跋迦婆仙に答へられたのである。それで一夜跋迦婆仙の所へお泊りになられたけれども、直ぐもう愛想をつかして、こんな者は相手にならぬと云ふので夜の明けるのを待ち兼ねて他に移つてしまわれたのである。

六 阿羅邏迦仙の思想

所がこの跋迦婆仙の居た彌尼迦と云ふ處から餘り遠くない處に、穿藏と云ふ處がある。釋尊は即ち此處に行かれた。此處には能く言ひ傳へてゐるところの彼の阿羅邏仙人と云ふのが居る。世間には是が阿羅邏仙人、伽羅邏仙人と二人のやうに云はれて居るけれども、それは間違である。是は後の説法の何かに於

て誤聞されたものと思ふ。御經には伽藍阿羅邏とある。此の阿羅邏仙人を訪問した。所が此の仙人は跋迦婆仙とは違つて、哲學的理想の宗教家である。即ちこの阿羅邏仙人の云ふ思想は、小乗の或る一部分の教義に現はれたものであつて、今のウパニシャットあたりの思想を代表して居るものゝやうである。中々立派な學説である。けれども釋尊は之に降服しなかつた。其の一二の點を紹介すれば、釋尊は斯う云ふてゐる。

『あなた斯う云ふ深山へ這入つて行をして居るが、眞の宗教家と云ふものは山の中に這入るべきものではなからう』

この見解が即ち違つた所である。小乗教ではあるけれども、小乗でも釋尊は宗教家が山へ這入つて貴方のやうな事をしてゐると云ふことは、眞の法行(宗教家の働きと云ふ意味)と云ふものではあるまい、法行の根本は慈悲心に置かなけれ

ばならぬ。(此の位のこととは釋尊が成道の時から云はれたに違ひない)慈悲心に置くとするれば、山の中へ這入つてさう云ふ事をやつて居るだけでは、慈悲心を満足せしむることは出来ぬであらう……と云ふのが即ちその時の議論である。茲に於て予は實に愉快を感ずるのである。釋尊は一切衆生に對して慈悲心を生ずると云ふ事のでなければ法行の精神が立たぬ。

『豈唯一人深山に入つて之を法行と名けんや』

と云はれてゐる。此處にはまだ立派な議論が澤山ある。しかし結局釋尊の思想を満足せしむる事は出来ない、大體小乗で云ふ四諦の説、或は眞如の説と云ふやうな事を云ふけれども、釋尊を満足せしめない、此の満足せしめられなかつた點は、どの點に在るかといふと、予の考では哲學思想より宗教思想、謂ゆる宗教の慈悲心と云ふやうな問題に於て、釋尊が阿羅邏仙人に満足せられ

なかつたと思ふ。予は斯く観するのである。釋尊の菩提を成就しやうと云ふ精神は、愛馬乾陟に對つて、

『吾が菩提を得たならば、汝にも分ち與へるものがある』

と云はれてゐる決して釋尊は一人の爲めにやつては居らぬ。

『若しも迦毘羅城内が眞實の境界であるならば、我は此處を去らぬけれども、城内に於ては、生老病死の苦み、愛別離の苦みを受けて、何れも眼も當てられぬ。謂ゆるの狀態ではないか、之を見ながら晏全として居られるか。』

と云ふことを云はれてゐる。故に阿羅邏仙人を『義分たず』と云はれたのは第一に今の問題であらうと思ふ。

それから又此處を去つて、今度は槃荼婆山と云ふ釋尊が長い行を積まれたと

ころの山に御出になるのである。それは別に師匠を尋ねて行くのではない。槃茶婆山と云ふのは一個の山であるけれども、其の麓に小さな村がある。是が伽耶城である。遂には此處で成道せられるのであるが、此の槃茶婆山と云ふのは今まで居られた所の穿藏と云ふ所からは恒河を渡つて行くのであつて、その途中に羅摩と云ふ有名な婆羅門が居つて、多勢の弟子を教へて居る、是は行く道であるからと云ふので、釋尊は常に之を尋ねられるのである。而して少しばかり話をせられたけれども、一向話にならぬのであるから、
『其様なことか』と云ふので振り向きもせず、直ぐ別れて自ら槃茶婆山へ行かれたのである。

斯くして山の餘り高くない麓の方の風景の佳い處を選び、樹下に静座せられて正念不動と云ふ行をやられたのである。何物が來ても我が清き精神を動かす

事は出来ないといふ不動三昧に御入りになるのである。

七 瀕婆沙羅王との對面

併し静座をして居られたと云ふても 達磨の面壁九年でも、飯を食ひに行つたり、風呂位には行つたと思ふけれども、太子も何時も不斷にやつたのではない。矢張り其の間に出ては少々位の行動はなされるけれども、大體槃茶婆山の麓で行をせられたのである。また時には王舎城と云ふ都へ行つて居られた。この王舎城は印度の尤も繁盛な都會で、其處の王様は瀕婆沙羅王と云ふ王様である。其處へ行つてその王様と話がされたこともある。この王様は立派な人であるから、太子とその間には有名な話がある。

『あなたは城を捨て、出られたさうであるが、何か心に不満があつて出られ

たのか、迦毘羅城は私の國よりは小さいから十分の仕事も出来ぬと云ふやうな考であつたかも知れぬが、それなら私の國を貴方に半分上げるからさう云ふ出家と云ふやうな事を止めたらどうだ、まだ半國では小さい、我が志はそんな小さなものではないと云ふのならば、此の我が國の力を以て他國を切り従へれば幾らでも出来るから、さうしたらどうだ、槃荼婆羅山の麓で座つて居ると云ふやうな事は止めたらどうだ。』

と云ふ事を懇々と瀨婆沙羅王が説くのである。このことは經文にも現れて有名な話であるが、悉達太子の之に對する答が愉快である。それは、

『あなたの厚意は誠に難有いけれども、譬へて見れば此の大海に沙迦羅龍王と云ふ龍の王が住んで居ると云ふ傳説がある、沙迦羅龍王と云ふのは大海の水を自由にするので龍王と云はれてゐる。それが牛の蹄に溜つた所の水

をやらうとかやらぬとか云ふ事が起つた時分に、沙迦羅龍王は何と答へますか、彼は牛蹄の水を食ふことはなからうと思ふ』

と斯く言はれた。これを他の言葉を以て言ひ現して、

『人生には多くの人々が權勢名利の中に漂ふて居るけれども、更に高い所の一つの光を與へなければならぬと思ふて國を出たのであるから、最早やさう云ふ宮殿とか財寶と云ふやうな物は、私に於ては何も關係がない』

と云ふことを云つて居られる。此の言明の仕方は色々あるが、兎に角俺は理想を以て立つたので、汝等には分らぬと云はれてゐる。是は釋尊の謂ゆる法王と云ふ、宇宙の大眞理を支配しやうと云ふ精神から沙迦羅龍王と云ふ事を云はれたのである。それから瀨婆沙羅王も、

『それではやつて御覽なさい、私は貴方が詰らぬことをやつたと思つて、一

遍ゆつくり話して見たいと思つて居たが、貴方がさう云ふ精神ならば、おやりなさい、愈々貴方が菩提を成就したならば私を一番に救ふて下さい……。

と云つて賛成してゐる。後に瀨婆娑羅王は釋尊成道の後、その大檀越となつて、よく外護の任を果した人である。

八 降魔成道

太子はあらゆる苦行をなされたけれども、決してその精神は屈しなかつた。此處を以て見ても太子の意志が如何に堅固であつたか、想像される。然しながら太子をして斯く多年の苦行を忍ばしめたのは、その意志が堅固であつたが爲めのみではない、太子をしてかゝる苦行を積んでまでも道を求めねばならぬや

うにせしめた性來の求道心そのものが極めて猛烈であつたがためであつたと思ふ。

元來人間にはお互誰でも求道心と云ふものは有つてゐる。常識あるもので一人でも菩提(道)を求めぬものはなからう。然しながらその求め心に應じて何處までも進んで行くものは千人中一人と云ふも過言ではない、大抵の人間はその道の求め難いのに飽きて以て中途で人生々活に没頭して仕舞ふのが普通である所が人類中に拔群の求道心を有つて生れる人がある。此の種の人は求道心の満足せられるまではどうしても心を安んじて居るわけには行かない、中途に如何なる障礙が来やうと究竟の目的を達するまでは一步も退くわけには行かぬ。即ち世の中にこの種の人々を稱して宗教的天才と云ふのである。釋尊や我が日蓮の如き即ちそれであると思ふ。

太子の苦行は六ヶ年間続いた。しかし終にはある日のこと菩提樹の下に於て芽出度く成等正覺の大結果を得るに至つたのである。この時の太子の精神的實驗は、即ち全く肉と靈、暗と光、惡と善との戦争であつたのである。この間の消息を昔の佛傳作者は、詩的空想を擅にして、太子の胸中に群り起る煩悶をば惡魔にたとひてゐる。しかしこれは單なる架空の文字ではなく、當時の太子は胸中をせめぐ煩悶を惡魔と考へ、又靜觀疑慮の太子の目には己が胸裡の精神を客觀的に惡魔の襲來するが如くに思はれたのかも知れない。今そのことをお話しすれば、悉達太子が大決心を以て菩提樹下に座したとき、これは妙覺の位に到るであらうと云ふことは早くも此の世に満ちてゐる天魔波旬の爲に傳はつたのである。其處で魔界の大王魔醯首羅と云ふものが、部下幾萬の惡魔共に號令して、太子の修行を妨げて正覺に到るのを未然に防ぐやうに命令した。即

ち之は太子が正覺を得れば彼等の領土が狹まり。正善の神の代になるからである。その結果、一人の惡魔は身を老婆羅門の姿に變じて太子の前に來り語つて云ふやう、

『あなたには敬服に堪えない、しかし出家だとか求道だとか云ふて世間はさう四角四面のものではない、何でも世の中は面白可笑しく楽しく送るに限る。それもあなたのやうに若い内である。あなたはそんな修業をやめて王城へ歸り、金殿や美人を思がままに得たらどうです』

と云つた、けれども太子はこの言葉を聞ても其の精神には少しの動搖を感じなかつた。

理屈や道理によつて太子の心を翻へさす譯には行かぬと知つた魔王は、今度は欲然、逸人、可愛のと云ふ三人の娘を呼んで彼等に何事かを命じた。

三人の娘は天女の如き装を凝して太子の許へ舞ひ下つた。その様子は苔の花の匂も深く、纖手鳧々春風に身を打ち顛ふ若草の如く舞ひ且つ躍る。之を見ては如何なる頑固なる男も溶ろけるやうである。そして朗かな聲を以て情歌をうたふのである。而して時には故意に柔かい手を投げて太子の頬に觸れて見たり時には羅衣を高く拂つて豊麗な肉體を現はして見せたり。卑猥、嬌態、淫態の限りを盡して太子の道念を破らせやうとした。

端坐默然依然瞑想をついて居られた太子も事茲に至つては見るに忍びず、『咄、悪魔去れ！』と一喝を興へると三人の少女は忽然三箇の骸骨となつた。魔王は、この計畫も失敗に終り今度は魔軍總出となつて、太子の修行してゐる所へ押し寄せ、暴力を以て太子に迫つた。即ち身には甲冑、手に手に武器を携へて眼には血を流し、口より火を吐き、猛惡の形相身の毛も竦立つやうであ

る。けれども太子は、宛ら下界の騷動を知らざるもの如く端然寂靜の態度を改めない。其處で魔軍は一齊に天上から太子目掛けて種々の武器を投げつけた。此の時不思議にも太子の身邊から大光明が放たれた。悪魔の投する刀槍は此の光明を受くると同時に忽然變じて紅白紅紫の花となつたと云ふことである。

九 釋尊の布教法

妙覺に達した後、佛陀は、依然として坐を起つことなく靜かに妙覺の醍醐味を味つて居られた。この味は味へば味ふ程妙趣は滾々として心靈の奥から宇宙の底から湧いて來る限りなく深い道理と妙趣、之を奈何して淺薄無智の衆生に説き傳へることが出來やう。しかしながら一度目を開いて衆生界を見れば多數

の群生が老病死の煩籠に囚はれ、しかも自ら自覺せず、徒らに不急の事に奔勞してゐる有様は見るも哀れである。其處で佛陀の精神中には大慈悲心が湧いて來たのである。

『三界は我がものである。其の中の衆生は我が子である。一生を教化に捧げて、一人でも多くの愛子を火宅の中から救ひ出さねばならぬ』
と斯の如き大精神を以て即ち新に得たる解脱の正道を傳へんものと正覺の座を立たれたのである。

然らば釋尊の布教の方法はどうであつたかと云ふに、是は學術的になつて詳しくは到底分らないのであるが、主として矢張り婆羅門などの用ゐて居た方法に依られたものゝやうである。また印度の婆羅門の用ゐて居た布教の仕方と、希臘の哲學者などの行うてゐたのと殆んど時代も同じく方法も似てゐたやうで

ある。希臘では元普通の人々を集めて説法すると云ふことは餘りなかつたのであるが、ソフィストが出てからさう云ふことが始つたのである。ソフィストとは賢者とか聖者とか云ふ意味の言葉で、當時の學者の事である。此等の學者が國から國へと漂泊して自分の學説を人口に説いて聽かせたものである。此のソフィストが希臘に出たのと、印度に佛が出られたのとは殆んど同時代であつた。佛出世以前の印度に於ては、やはり婆羅門の學者の許へ人々が集つて來るさうすると婆羅門はそれ等に對して教を授けるのであつた。釋尊もやはり主として此の法を用ゐられたものらしい、毎日午前には僧團の食物を得る爲に諸弟子と共に托鉢に出られた。午後には住處に歸つて弟子等の爲に説法をせられた。さうして弟子達は釋尊の教へに隨つて或は座禪をしたり研究をしたりする其の間に地方から來集する者の爲には又法を説いて聞かざるゝと云ふ風であつ

た。

また釋尊は屢々布薩會と云ふ會合の席上に臨んで說法せられたことがあつた。これは月の八日とか十四日とか十五日とか云ふやうに日を定めて、一地方の僧侶が一所へ集り、各々前に犯した過失汚行を互に懺悔し且つ戒律の法を讀むと云ふ會合であつた。これも當時の婆羅門が行つたのが頗る有効であつたので、佛もそれを採用して行はれたのであらう。日中には印度のやうな熱帶國は集つて來る人々も又話しに出る人も出にくいから、多く夕方から此の會は初まるのである。今日でも夕方大きな木の下などへ人を集めて面白い話をする中にそれとなく宗教上の教訓を含めると云ふ事が、印度には行はれてゐる。釋尊時代の布薩會と云ふものこれと餘り多くの差はなかつたらうと思はれる。

併しながら釋尊一代にその教の弘つた區域は、非常に廣大な地で、北はヒマ

ラヤ山にして南はビンデラ山迄、恒河の流域一杯に及んでゐる。西北方のカンダラ地方だけは佛滅後二百年頃までより弘まらなかつたが、西南の半島は佛在世の間に既に佛弟子によつて其の教が傳へられて居たやうである。斯の如き廣大なる地域に交通機關の何も備つて居ない時代に於て、僅か四十年餘りの間に佛の教へが一杯に廣まつたのは、如何なる方法によつたであらうか、それは元より釋尊の人格が婆羅門などのそれよりも飛び離れて優れて居たのが最大の原因であつたに相違ないが、しかし又釋尊の布教の方法が甚だ宜しきを得て居た事も其の有力なる原因の一であつたらうと思ふ。

一〇 釋尊布教法の長所

然らば釋尊の布教の方法はどう云ふ點に於て優れて居たかと云ふに、予は釋

尊そんの布教ふきやうの大方針だいほうしんに二つあつたやうに思ふ。其そのの第一だいいちは釋尊しやくそんは弟子でしも自分じぶんも成なるべく一つ處ところには居をらず、それこれく異ことつた地方ちほうへ趣おもむくやうに方針ほうしんを取とられたことである。

釋尊しやくそんは多く王舍城わうしゃじやうと舍衛國しゃゑこくに居をられた。これは智度論ちどろんの解釋かいしやくによると王舍城わうしゃじやうは成道じやうだうの地ちであり、舍衛國しゃゑこくは生うまれた地ちであるから、其そのの恩おんを報はせん爲ためだと云ふことである。主しゆとして北きたの地ちに居をられたと云ふもの、又隨分またずぶん方々はうはう歩あるかされて居をる。

釋尊しやくそんは成道じやうだうの後のち、第一だいいち番ばんにペナレスに於おいて五比丘ごびくの爲ために説法せつぽふし、彼等かれらを弟子でしとせられ、次つぎには耶舎やしやの爲ために説法せつぽふし、それから續つづいて耶舎やしやの親類友人しんるゐゆうじんに説法せつぽふし皆みな悉ことごとく之これを弟子でしとせられた。それで初はじの五比丘ごびくと合あはせて佛弟子ぶつでしが六十人にんとなつた。そこで釋尊しやくそんは一日六十人いちにちにんの弟子でしに告つげて云いはるゝには、かう澤山たくさんなものが

一處しよに集あつつて居をても仕方しかたがないから、此この六十人にんの者ものが各々おのづか異ちがつた所ところに行いかうではないかと、それより各々おのづか部署ぶしよを定まめて一人ひとり／＼別べつの處ところへ布教ふきやうに赴おもむいたやうである。斯かう云いふ主義しゆぎが釋尊しやくそんの布教ふきやうには早はやくから行おこなはれ、後々のちのちまでも夫それが實行じつかうせられたからである。

今いま一つの方法はうはふは殊ことに吾々われの注意ちゆういすべきものであらうと思ふ。それは釋尊しやくそんが當時たうじの學術界がくじゆつかい宗教界じゆきやうかいに於おいて最もつとも勢力せいりきよくあるものを選えらんで、それを佛敎ぶつぎやうに歸依きゐせしめられたと云ふ事ことである。傳記でんきによると、前述ぜんじゆつの五比丘ごびく及び耶舎やしやの一族いづくを悉ことごとく手分けてわけをして諸方しよほうへ布教ふきやうをやつて置いて、自分じぶんは苦行林くぎやうりんに歸かへると云はれた。苦行林くぎやうりんには三人にんの迦葉兄弟かせふぎやうだいが居をたのである。彼等かれらは當時たうじの宗教界じゆきやうかいで最もつとも有力りうりきよくなものであつた。兄あにが五百人ごひやくにんの弟子でしをつれ、次つぎぎ三百人さんひやくにんの弟子でしを連つれ、次つぎは二百人にひやくにんの弟子でしを以もつて居をた。釋尊しやくそんはこの三人にんの内兄うちあにを一番最初いちばんさいしゆに化くわせられたが、これ

には餘程骨を折られたらしい、何でも數十回も往復問答して色々の奇蹟もあらはされた。佛はあまり奇蹟などは行はぬ人であるが、此の時に限り種々奇蹟を行はれたので、其の骨折の非常であつたことが分る。その結果遂に彼等を弟子とすることが出来たのである。

さて次に釋尊は當時の俗界に於て最も有力であつた摩伽陀國王を濟度せんが爲に大迦葉尊者を連れて行かれた。そのとき摩伽陀國王は佛が迦葉を連れて來たのか、迦葉が佛を連れて來たのか分らなかつたが、色々由來を聞くに至つて、漸く迦葉が佛の弟子となつたことを知つたと云ふことである。これに依つて見ても當的迦葉が印度宗教界で如何に名聲が高かつたか分るのである。

更に佛はサンヂヤ、と云ふものゝ濟度に取りかゝられた。彼は二百五十の弟子を持つて居た。かの有名な舍利弗、目連もその弟子の中であつた。師匠のサ

ンヂヤ、が遂に佛の教には従はなかつたが、舍利弗、目連は佛の弟子になつた。所が二百五十人の弟子は實際はサンヂヤ、に歸服して居たのではなくして、實は舍利弗、目連の德に歸服して居たのであるから、此の二人が佛弟子となるに至つて、二百五十人も一所に佛弟子となつて仕舞つた。サンヂヤは、其の後悲觀して血を吐いて死んだと云ふことである。

斯の如く釋尊が上の者から濟度すると云ふ方針を取られた事は、大に注意すべき點である。尤もこれは今日の世とは少し事情の違ふ邊もある。昔は全く專制時代であつたから、上の人が佛に歸依すれば、大の者は自然にそれについて來た。然るに今日のやうな民主思想の盛んな時代にはさうばかりは行かぬ。けれども何時の世にも必ずどこにか勢力の中心と云ふものはある。それを落せば他は皆ついて來るは必定である。今日では貴族上流よりも民衆の方に勢力があ

るかも知れぬ。さうして今日以後は尙一步進んで第二の國民たる兒童から先きに教化するのが得策であるかも知れぬ。

一 人格的教化

さて釋尊は人に法を説くに當つては、其の相手方の既に持つてゐるものは、之を頭から打ち壊ると云ふことをせず、成るべくそれを活かして、自然と自分の説かうとする法に流れ込んで来るやうに導くと云ふことを大體の方針とせられたやうである。

或る人が特種の經驗と特種の智識を持つて居れば、それを利導し善導し、適當なる方法によつてよい方へ向けて行くと云ふ方針であつた。何故佛が斯う云ふ方針を取られたかと云ふに、者し先方の持つて居るものを打破するとき

は、一度は必ず無信仰の状態に陥る。然るに直ちにそれに代る處の新しい信仰が出来ればよいけれども、萬一それが出来ない時にはその人間は非常に不幸な状態に陥らざるを得ぬ。道徳の場合でもさうである。佛は人をこの不幸に陥らしむるに忍びなかつたので、上述のやうな方針を取られたのである。然ればこれ即ち佛の慈悲深き精神からあらはれた所であつて、實際上もつとも肝要な點の一つと云はなくてはならぬ。

更に又、一體布教とか説法とか云ふものは、口で説くのは抑も末のことである。身體の教法、即ち身の實行こそ其の根本である。身體の説法が出ず、又はそれが悪かつたら如何に辯説が巧みであつても駄目である。而して謂ゆる身體の説法とは即ち崇高なる人格である。人格が勝れて居れば、風を望んで人皆之に歸服する。蓋し釋尊の布教があつたに有効であつたと云ふことは、特に當時

の一般の宗教家たる婆羅門の腐敗墮落に對照して、その人格の圓滿高潔であつたと云ふことが大なる原因であつたのである。

また當時の婆羅門の生活に二種類あつた。其の一つは飽くまで此の世の欲樂に耽ると云ふ流義であつた。今一つは極端なる苦行のみをやる婆羅門である。釋尊も始めはこの方法をとられたのであつたけれども、後その無意義なることを知つて、之をやめられたと云ふことは前述の如くである。而して最初に彼の五比丘を度せんが爲に鹿野苑に於て說法せられたが、その時の説法の趣旨は、欲樂に耽けることは無論正しい道ではないが、又無意義な苦行を事とするのも決して正道ではない。此の二つの極端を避けて中道を進むのが正しい道であると云ふことがあつた。斯くの如く釋尊當時の婆羅門は二つの極端に墮した者のみで、一般世間の者も殆んど愛想を盡して居つたのに、釋尊がよく中庸を守つ

て眞面目な道をなされたから、世間の釋尊に對する尊敬が翕然として集つて來たのである。

神儒佛三教と日蓮主義

- (一) 日本文明史の公平なる觀察……………(二) 國體と三教との關係……………(三) 文
- 明史上に於ける佛教の功績……………(四) 國家が佛教を棄ざる所以……………(五) 俗
- 神道と純神道との區別(六) 三教と皇室干渉の尊嚴……………(七) 皇室尊嚴の偉力
- ……………(八) 日本民族性の特色……………(九) 純神道の意義……………(一〇) 國家的生
- 命と護國神。

一 日本文明史の公平なる觀察

予は日蓮上人の教を奉ずる一人であるから、間接に日蓮上人の主義に關係のある御話をして見たいと思ふのである。それは『神儒佛三教と日蓮上人』と云

ふやうな廣い意味でお話しやうと思ふ。
 最初に此の三教と我が國の文明の關係に就て少しく申上げて、次に三教の特色に就て自分の考へを申述べ、次で 日本文明史上の光彩を述べて見たいと思ふのである。

我が國の文明史といふやうなものを極く公平に大觀すれば、今日までの文明は無論この三教の感化に負ふところが多いので、此の三教を除けば日本の文明は空虚であらうと思ふ。而してこの三教の研究とか、或は三教の關係といふことに就ては、それ／＼學者が試みられてゐるやうである。また或は古い問題として棄てられて居るものもあるか、予の考ふる所ではこの研究はまた完成しては居らぬ。之を棄てるよりは、三教に就て更に新しき意味に於て研究を進めねはならぬ必要があると思ふ。嘗に研究のみではなくして、この三教の有つてゐる。

る特色を今日及び將來に益々發揮すべきものであると云ふことを信するのである。

この三教が我が國の文明に錯綜して貢獻して居ることは、是は自然の數理でさうなつてゐるので、殊更に要らないものを迎へ入れたのでなく、無くてはならない必要からして之が我が國に用ゐられ、先づそれ相當に發達をしたものである。而して今日その必要は消滅してゐるかと思ふと決してさうではない。我が國の文明よりこの孰れかを忘るれば忘れた所に大なる缺陷を生じて來るのである。

其處で學派といふ方から考へると、或は神道の一つに固まつて儒佛を敵とした人もあり、又儒教に深くして神佛二教を疎んじた人もある。又佛教に囚はれて神儒二教を忘れた人もある。或はその中の二つを採つて一つを忘れたものも

ある。是等の三つを兼ね學んでも其の調節調和の程度が淺薄であつて、皮相的な調和に満足してゐるものもある。如是學派の方から云ふと色々あるけれども、それは學者とか僧侶とか云ふ上のことであつて、廣く日本の文明を大觀すれば、此の三教が頗る能く調和されて進んでゐる。寧ろ學者の方にさう云ふ淺薄狹隘な考へがあるのであつて、實際方面は三教を頗る能く調節してゐるのである。今日の有様で例を擧げて見れば、學者の方では例へば法科とか理科とか文科とか云ふものを専門に學ぶのでありますけれども、日本の文明は文科の文明でもなければ法科の文明でもない、日本の文明と云ふものゝなかには、文科もあれば理科もあれば法科もあれば工科もあり、その他すべてのものが綜合されてゐるものがある。然るに學者の方では何時も狭い一つに學ぶとてろによつて總てを推さんとするのであつて、日本の全體の文明は、決して儒者とか僧侶の考

へて居るやうな狹隘固陋なものではなくして、頗る包容的に調節されて居るものである。

二 國體と三教の關係

能く自分は云ふことであるが、學者になると事柄が面倒であるけれども、寧ろ一般人を以て考へればすぐに分る、納豆賣りを連れて來るとか、車挽を連れて來るとか、無學文盲なものを連れて來るとかして日本人の頭を調査して見ると、決して日本の貴い意味を忘れてゐるといふ譯はない。又聖賢の教を侮つてゐるといふこともない、佛陀の教を輕んずるといふこともないのである。分らぬながらも矢張り日本の國は大變立派な國であるといふことを知つてゐる。又孔孟の教が貴いといふことも知つて居る、又お釋迦様の有難いといふことも知

つて居る。一般に皆悉くさういふ風な頭をもつて居る、又之を朝廷の思召ともいふべき方から考へるといふと、最初に儒教が應神天皇の時に渡り、又欽明天皇の時に佛教が這入つたが、之を迎へ入れて日本の文明に貢献せしめられる思召で、之が渡つた時からして今日に至るまで何時も變動なく三教を重んじ遊されて居ると思ふのである。

維新以來佛教に對する公けの思召を伺ふことは出来ないけれども、併し朝廷の事實上の思召に於ては決して維新の政變に携はつて居つた人の考へたやうな狹隘な御考を御持ちになつて居らない。今日も及び將來も私はさうであらうと思ふ。

一般人及び朝廷としては何時も三教の思想が能く包容され調節されてゐる。學者とか或は理想を以て戦ふ人は、其の間の一つに囚はれて居る有様を示すの

じやないかと思ふ。それは學ぶ所に僻して他を排斥するといふことは、是は人間として免かれ難いことであるけれども、實際最早や今日に至つてはさう云ふ古い型を追うて居るべきものではなくして、此の三教相互の關係と各々に有つてゐる特色とを尊重して公平に其の眞價を認めねばならぬ。我が國文明の内容に消化せる三教の力は決して一人や二人の學者の説で撲滅することの出来るものではない、此の三教の眞價を充分に認識して、さうして三教の特色を明かにし、又其の三教の調節を理想とし決して其の一を採つて他を排斥すると云ふ態度に出てゝはならぬ。調節の上に於て各々その特色を發揮し、而して大なる理想と高き程度に於て日本の文明に貢献するやうにし、之を標準とし根據として歐米の思潮を咀嚼するを要するのである。然らば適當な思索撰擇が出来ると思ふ。單に歐米の思想に向つて其の撰擇を誤るなと云つても、思索の標準がなか

つたならば、何うしても之を誤まらざるを得ないのである。何を根據として歐米の思潮の探るべき點を判断するかと言へば、即ち我が國過去の文明の内容を成せる三教の精神に基いて、新思潮を能く咀嚼し又この見識に依て新しいものを創造進歩させて行かねばならぬと思ふ。

今の日本の大部分の人の考は三教に對する研究が餘りに疎漏であると思ふ。而して三教の調節といふことを全然逸し去つて居はしないかと思ふ。故に予は此處に自分の卑見を聊か申述べやうと思ふ次第である。

三 文明史上に於ける佛教の功績

日本の文明史を通觀して、此の三教がどれ程我が文明を翼賛したかを見ると、是は實に明白な事實で、今更自分が申すまでもないことである。唯一言して置

きたいのは、此の文明に佛教が貢獻してゐることは、多くの人の認めて居るよりは餘程大きいものであると云ふことである。

是は徳川時代に在つて、佛教嫌ひの學者が多く筆を執つた書物があり、佛教嫌ひの人の思想が非常に多く學問する仲間に入つて居る、それで日本の歴史を詐つて居ることが其のまゝ眞實の如く傳へられてゐる、けれども正直に日本の歴史を調べたならば、日本の文明と云ふものは、佛教に負ふところが非常に多いのである。それをザツと考へて見ても、奈良朝時代の文明に至るまでの日本の文明といふものは、素朴なものであつて、貴いところはあつたけれども磨かざる璞見たやうな物であつて、充分な文明といふことには見られない。それが奈良朝に来て大に文化が發展をした。これは無論佛教徒の力であると思はねばならぬ。

奈良朝の文明は殆んど佛教で、無論儒者といふものは獨立して居らず、神官といふても思想に關係は無い、又さう云ふ學者も無い、日本の文明はその時分は皆僧侶の力である。儒教の事を日本の文明に紹介するのにも、亦たゞ神の道を知らしめるのにも皆僧侶の手を傳うて來たのである。

それからして平安朝の文明と云ふものも無論僧侶の手にある。それでこの儒教といふのも皆坊さんがやつて居る。それからたゞ神の方を明かにし、歴史を明かにするのも坊さんが行つて居る。日本の學問宗教道德の一切を僧侶の手に依て行つたものである。

弘法大師が綜藝種智院と云ふものを設けた。綜藝種智院と云ふものは儒教を教へ日本の文明を發達せしむる上に於て非常な貢獻のあつたものである。それ等も皆僧侶の計畫である。多少儒教を行つて居る人があつても坊さんの學問に

は及ばなかつたのである。鎌倉時代にあつても矢張り僧侶が日本の文明を啓發しそれで學問はすべて僧侶の手に歸して居つたので、儒者として見るべき人は殆ど無いと云つても過言ではあるまいと思ふ。

又神道の學者として吉田一流の人は出て居つても、夫等は極く幼稚なものである。足利時代になつても矢張り學問は僧侶の手に在つたのである。

四 國家が佛教を棄てざる所以

處か徳川時代になつては僧侶が還俗をすると云ふやうなものが出て、漸く其處に儒者が獨立をするやうになり、それでもまだ神道の學者はありませぬ。けれども僧侶の方からそれ／＼學者が出て居つたので、段々後に至つて儒者の方の學者が出來て、又復古神道の者も出て來たのである。併しながら、徳川時代

は儒者の感化に依て日本の文明が進んだのであるか、或は神道の手に依て進んだのかと言へば、矢張り一般文明は僧侶の手に關係があつたのである。それは武門武士の間には儒者が勢力を得たけれども、町人とか百姓とか大多数の日本國民が、不充ながら道徳の觀念を養ひ事實上に涉つた知識を得て人間らしき行爲をしようと云ふことになつたのは、決して儒者の手に依て薰陶されたものでなければ、神官の手に依てされたものではない。矢張り佛敎家の手に依て百姓町人が何うか斯うか一生を理解し、人らしい行爲をして參つたものである。

斯の如く佛敎は實に長い歴史に亘つて日本の文明に貢獻して居るもので、我が國の學問藝術は僧侶の手に依て發揮せられてゐるのである。これは過去のことであるが、兎に角予は是等の三敎が日本文明に貢獻した歴史を忘れて進んだ

のでは、到底歐米の思潮に對して適當な取捨をすることも出來ず、それで根據を捨て、切りに新しい思想を受け入れやうとするならば必ず失敗を來たすと思ふ、即ち新しい思想に向ふには先び過去の思想を忘れぬやうにして置かねばならぬと思ふのである。物事はすべて極く専門にやつて行けば面倒臭くなるものであるけれども、大觀すれば三敎の特色は明かに分つて居つて、これが今日棄つべきものか何うかといふことを吟味するのは其處にむづかしい問題ではなからうと思ふ。故に予は今それに就て氣附いた三敎の有つて居る特色を簡單に次に申上げて見たいと思ふ。

五 俗神道と純神道の區別

先づ神道の特色といふのはどの邊にあるかと申しますれば、是は神道といふ

言葉では誤解が起り易いのでありますが、學問の上では多くの人の考へて居る神道は俗神道と云ふので、之に對して平田先生時代にも此の言葉が使つてあつて、純神道は唯神の道で、即ち我が建國の時から傳つて居る神聖なる日本の道、敷島の心和心とは朝日に匂ふ山ざくら花の即ち敷島の道である。勅語に、

斯ノ道ハ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スベキ所

と仰せられてゐるのが即ち純神道である。是は一般の宗教化した神道とは違ふので宗教化した神道であつたならば、子孫臣民の俱に遵守するといふ譯には行かぬ。信する者は奉ずるが宜しい、信じないものは奉じなくとも宜いと云ふやうなものである。夫が即ち俗神道である。或は之を鈴振神道とも云ふ。今日學問上の言葉で言へば教會神道である。神道の中で謂ゆる丸山教會、天理教會、

蓮門教會、黒住教會といふやうな教會の名に依て取扱はれて居る宗教である。是は佛教や儒教の意義を混入して寄せ合せて作つて居るので、なほそれ等ののが宜いか悪いか、予は今日問題にするのではないから、當否を云ふのを措く次第である。

今予が神道と云ふ言葉は純神道を指すので、即ちたゞ神の道を云ふのである。其の純神道の特色と云ふは宗教が表になつて居らないからである。即ち國家的の道徳と云ふか、其方が表である。故に第一に數ふべきものは建國の大理想とでも言ひますか、さういふことが非常に大切な點であらうと思ふ。

日本の神様は宗教を開かれたのではなくして國を御經營に成つたのである。即ち宗教を立てられたのではなくして國を建てられた、國の守り神である。宗派の神様ではないのである。故に其の時の建國の大理想とも云ふべきものは何

であるかと云ふと、是が即ち我が國が世界萬國に卓越してゐる所以であつて、唯々妄りに日本の國が立派々と云ふ譯ではない、すべて日本の國を建てたる時の精神と云ふものが世界萬國に冠絶してゐるのである。

即ち神武天皇が日向から東征せらるゝ時に御發しになつた大詔に出て居るのである。我が國を建てると云ふことは、天業を恢弘し天下を光宅するにあるので、我が國は蓋し六合の中心であつて天の仕業を地上に押し擴げて天下の人類に光を與へ、家を與へて救濟するといふ、この大きな目的は一時に果す事は出來ないから、世界の眞中に國を建て、之を中津國と稱せられた。此の國を建る所以のものは唯々日本の國家の便利を圖り、國民の幸福を圖るばかりではなく、此の天業を恢弘し、天下を光宅せんが爲に茲に國を建てるとの仰せである。斯う云ふ大きな理想は、外の國を建てて精神の中には一つも見ることを得ない、

外の國は皆自己の利益が目的である。日本は自己の利益の爲に建てた國ではない、天の仕業の爲に天下を光宅する爲に建てられた國である。この事が明かに神武天皇の大詔にある、それが建國の詔と稱せられるものであらうと思ふ。

而して其の事唯一度左様に云はれた丈けならば、その價値は分減せられるけれども、それが所謂皇祖皇宗の遺訓となつて、祖宗の宏謨と仰せられることになつて、歴代の御皇室にそれが傳はり、今尚、その御精神と云ふものは少しも御忘れになつて居らないのである。それに因て朝廷では御働きなすつて居るのであらうと思ふ。而して神勅にある天壤無窮といふ言葉も、唯々天地と窮りなくお續きになるといふ意味だけではなくして、此の無窮といふことは、中庸に『悠久は物を成す所以』

といふことがあるが、即ちこの意義であると思ふ。永く御續きになるといふ

事は大業を成されるに就て永き時間を要するので、其處には意義なく永く御績きになるといふのではありませぬ。即ち天壤無窮の皇運といふことが、天業を恢弘し天下を光宅すると云ふやうな大理想を實現し給ふ御爲に、永く皇統の存續と云ふことがあるのであらうと想察し奉るのである。その意を段々押し擴げて考へて行きますと、謂ゆる萬邦に比類なき我が國家といふものが茲に明かになるのであつて、之を今の道徳論の上に就て考へても西洋の個人主義の道徳であるとか、或は基督教の博愛主義の道徳であるとか、或は新しいアナキストの社會主義の思想といふやうなものに比較しますれば、それは皆チヨツと思附は宜いやうであるけれども、能く考察を遂げると皆かたよつた思想であつて、我が國の建國の大理想には及びもつかぬものである。

ない………事實に於て及ばない、昔建てられたから結構だといふのではなく、實際に冷かに考へて比較するに、此の建國の大理想が高く光つて居るが爲に、今日でも我が國が貴いのであると思ふ、それを國民に徹底して教へて行かねばならぬと予は信じて居る者であるが、恚う云ふ事が純神道の一つの特色で、是が儒教に於ても佛教に於ても學ぶことの出来ぬ神道の有つて居る特色なのである。

六 三教と皇室干渉の尊嚴

次には是に繋つて現はれて居るのが即ち御皇室の尊嚴であつて、是は今更ら申すまでもなく、此の祖宗の御精神を承け繼がれて何時も渝らない、内に於て國民の保全を爲されるのも、外に於て世界の文化を開發せらるゝのも、延いては人類全體が此の御皇室の御聖徳の下に保護せられなければならぬと云ふこと

になつてゐるのであつて、外の國では學者の發見とか軍人の偉勳とか云ふものは、切れ〜に現はれてゐるのである。その一人が立派な人であつても、その説はそれに止まる、英雄の働きが立派であつてもその英雄の働きは斷續がある。御皇室に限つては其の理想が立派であると同時に、夫が謂ゆる天壤無窮の神勅を繼いで渝らない、學者の議論などは色々時代に由つて變遷はあるが、此の御皇室の尊嚴といふものはさう云ふ變化がない。嚴然凜乎として萬世に傳つて行くべきものであつて、外の文明が或は興り或は絶える間に御皇室の尊嚴は最後の文明に支配されるまで續いて行くといふ有様である。誰が變へやうと云つて變へられない、非常な鞏固な意義を以て現はれてゐる。

例へば既に事實に現はれた文明を融合する上に就ては支那の文明が來た時分にも、印度の文明が來た時分にも、皆此の御皇室の尊嚴によつて適當に日本に

同化したのである日本に同化すると云ふと日本の學者が行るかと思ふに、學者はたゞ一部の働きをするまでである。孔孟聖賢の教へでも、本國の支那に於てはその意義が不透明であつたに拘らず、日本に來ると益々その粹を發揮したのには、是は日本の御皇室の靈力に依て發揮されるので、聖賢の教は東洋文明の花であるのみならず、世界の文明にまで光を放ち得べきやうに御皇室の力に由つて洗鍊せらるゝのである。

又佛教もその通りであつて、印度に於てその光を失ひ、支那に於ては佛教はまだ決して光輝を失して居るけれども、日本に在る佛教の教義、學問、主張と云ふものは誠に立派な宗教として存じて居る。而して是が矢張り一般の民衆の精神からも未だ失せたものでなくしかも朝廷の御聖徳は矢張り佛教に就てもその佛教を日本化せしめてゐる。日本で佛教が擴まつたのは朝廷の御力であり、

又日本化も朝廷の靈力である。今後佛教が復活するのでも御皇室の尊嚴に結びついた時に實際復活するであらうと思ふ。遠からず維新の時から来た一時の變動は除かれるだらうと思ふのである。

七 皇室尊嚴の偉力

近頃歸一協會あたりでも思想の研究にはどうしても或る意味に於て人生には宗教心を尊重しなければならぬと云ふことになつて、その意見を文部大臣に提出し、一般教育界にも及ぼすことになつて決定した次第で、近き將來に世の中に發表されることであらうと思ふが、そこには矢張り澤山の學者が寄つて、今迄宗教に反對の人も澤山あるので、文部大臣などつとめた人も皆之に這入つて居るのである。さう云ふ機運が向いて来れば朝廷の御力が其處に及んで来るわけである。

けである。

又西洋の文明を吸収するのでも、何處から来たかと云ふと第一に維新の文明は朝廷の御力で成つてゐる。謂ゆる五ヶ條の御誓文に依つて、

知識を世界に求め大に皇基を振起すべし

と云ふ思召から来た。それが歐米に學者を派遣するやうなことに成つた、又此の文明は無論戦争に大關係があるのであるが、日清、日露の兩戦役、それと今度の大戰亂に就ても無論御皇室の尊嚴の力に及んで、それが軍人の精神に影響して大勝利を得たのである。その事實の力なくして唯々尊嚴と云つて之を尊敬しなければならぬと云ふ偽善的のものではない、それだけに實際の御聖徳が事實に光りを發して、日本の文明を作つてゐる、此の點は飽く迄も忘れることの出来ないものである。西洋の倫理にまれ、また道德にまれ、宗教にまれ、此

の御皇室の尊嚴を翼賛せぬ者は日本に受け入れることは出来ない、日本の文明と調和することが出来ないと思ふ。

更にその次に數ふべきものは國民的精神と云ふが民族的精神と申さうか、この名前は學者に於て色々言はれるけれども、先に云ふた所の一般の日本人が有つてゐる精神と云ふものがある。即ち之を一應御紹介する必要があらうと思ふ。

八 日本民族の特性

この吾々お互それ〴〵具有の精神と云ふものは、即ちそれが事に觸れて必ず現れる、これも矢張り此の前の二點に基いて起るのであるが、併しながら又國民の方にも特色がある。それは上からの御威徳が及ぶ譯である。けれども併しその御威徳を受けてそれに答へるやうに發表して行つたと云ふことが我が民族

の特色であるのである。是は忠君愛國の精神であるが、謂ゆる、

億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟ス

ので、平素は色々なことに一致を缺いて居つても、

一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ズ、

と云ふことで、忠愛の精神に目が醒めて来る。それは戦のことばかりではない、道徳のことも宗教のことも皆同じで、あらゆる道徳あらゆる思想あらゆる宗教、あらゆる事柄が此の建國の大理想、御皇室の尊嚴に觸れるとか反くとか云ふことがあれば、どう云ふ事情があつても夫を抛つて國民が反省すると云ふことである。その反省しないものは日本人ではない。己の學ぶ所に囚はれたり、或る宗教を信じたらその信仰に囚はれたり、或る學術を學んだから夫に溺れて行くと云ふが如き人は國民的精神を忘れてゐるのである、如何なる迷も

國民的精神に由つて、覺醒さるべきである。而して此の國民的精神は忠愛の觀念であるが、更に別言すれば此の考は團結精神である、一心同體になつて日本國を擁護して行くところの精神である。小さな事情に拘束せられないですべてがその大精神に歸一するといふ、さうした貴い性格を有つて居るのである。是は外の國では自分が言ひ出したことであるとか、自分が信じて居ることであるとか、謂ゆる思想の自由、信教の自由と云ふこともあるが、その可否は且らく措き到底一人の考ではその一人のことだけであつて、此の日本の國に行はれてゐて建國以來の精神に勝ると云ふことは出来ない。

例へば一つの會があつてその會の主義精神を賛成して入會してゐる以上は、自分の考が多少それに違つたことが出来ませうとも、會へ這入つた以上はその會の精神に従はねばならぬ。一國民が各々の理窟は有つても兎に角日本國民で

ある以上は、此の建國の大理想大精神には反くべきものでないと云ふことをみな知つて居ると云ふのが、即ち國民精神で、それはどう云ふことかと詳しく言ふて聞かさなければならぬと云ふものではない、日本人は簡單に此の大精神を理解して居る國民である。

九 純神道の意義

それから更に今一つ數へて見れば天佑の保全であつて、我が國民はたゞく政治や軍備や經濟と云ふやうな人の力だけを以て國家を經營してゐる國民ではない、無論人力の及ぶところは盡して居るけれども、更に偉大なる天佑が我が國に降つてゐると云ふことを信じてゐる此の意義に於ては宗教的國民である。日本國民はチャンとそれだけの信念を有つてゐる。而してその信念が或る宗教

のやうな下らない迷信に生きて居るのではない、謂ゆる堂々たる精神である。悪いことをしても守つてくれると云ふわけではないが、正義を行ふが故に天は我に與すると云ふ精神である。而して此の天と云ふものは唯宗教上の意味の天とか漠然たる天道と云ふそれではないので、即ち此の天と云ふは我が國では神様を指し、別言すれば我が國には祖宗の神様がある、その神様の御力が天佑を御降し成される、更に云へば、護國の神明を信するのである。國を護るところの神……護國の神と云ふことを日本人は信じてゐる。

此の護國の神と云ふことは或る一派の宗教で神と云ふものと違ふので、どう云ふ風に違ふかと云ふと、或る一派の宗教の神は宇宙の神、或は個人の病氣を心配するとか、或は死んで地獄に行くの天國に行くのと云ふやうな事を心配する神であるが、日本の神はさうではなくて、此の國の盛衰興亡を御護り成され

る神である。

故に伊勢の太廟へ行つて『父が死にましたが高天原へ遣らして下さい』と云ふことを祈るのではない、或は『私の母が病氣だから癒して下さい』と云つて祈るところのそれではない、此の伊勢の神は國家の隆運を祈るところの神様であつて、朝廷からしては、即ち『民安かれ』と祈り給ひ、さうして日本の國威國光を輝かすことをお祈りになる神様である。

此の意味が御分りにならぬと即ち伊勢に行つても單に國民が道德的に頭を下て置くのであるといふやうな話であり、他面には無暗に宗教化して、日本の神様で一切の宗教を間に合はさうと云ふやうな神道萬能主義を以て佛教は要らぬ、儒教は要らぬと云ふ風な、神道を宗教の方へ擴大しやうと試みるものがある。それは最負の引倒しと云ふものである。是は宗教的要求と云ふものが種々あつ

て面倒臭い議論が澤山起るのである。日本の神様は宗教と云ふものから少し離れた國の神様である、故に之を棄てることは國民としては出来ないのである

一〇 國家的生命と護國神

耶蘇教の如きも宗教としては良い所を有つてゐるけれども、彼の歴史は猶太の國の神を攻撃して宇宙の神を立てた、即ち基督教は國の護り神を征服して進む教へである。到るところその國の護り神を降服さして夫を撲滅しつゝ進んで來たものであるから、そこで一神教と稱する。

極く嚴格に云ふならば、日本に來たならば日本の護國の神を斥けなければ基督教が成立たぬといふことになる。それが基督教を立てた大理想である。

日本の方は此の護國の神を頂いて。それから起つて來た國である。それが御

皇室の淵源を成してゐる。護國の神は日本の國家の生命である。日本に於ては決して神勅を棄てることは出来ない、基督教の方でも宇宙の神を奉じて國家的の神を征服して來た歴史を棄てることは出来ない、併しながら今の處外交的に兩方が一寸甘く穩かに接戦せぬやうになつては居るが、基督教の根本の理想及歴史的の精神は棄てることは出来まい、それが出来れば基督教ではない、併し基督教界に偉人が出て、傳教、弘法が佛教を日本化したやうに、基督教を西洋のものでなく、その一神主義の精神を棄て、調和を試みるならばいざ知らず今日見渡す限りの宣教師、牧師にしては夫だけの大膽なものはないかと思ふ。矢張り基督教の在來の思想に服従して居つて脱化し能はざる傾向を有つて居るのである。

我々日本人としては、純神道を奉じて伊勢の太廟を崇敬し、或る意味の宗教

的觀念が籠つて居る敬神の思想を棄つことは出来ない。この敬神の思想を捨つれば日本のあらゆる道徳思想の根據が動搖して來るのである。

曾て森文部大臣が伊勢の太廟に行かれて神聖を穢されたと言ふことがある。事實かどうかは知らぬが、丁度私が始めて東京に這入つた日のことである。未だ東海道の汽車は無く、丁度濱松から静岡の間の小夜の中山を越えて、書生時代に東京に這入つた時に、その日が文部大臣の暗殺された日である。よく覚えてゐるが、それは神聖を穢した爲にやられたと言ふことである。この敬神の思想は日本では滅ぶるものではない、どうしてもそれは日本の純神道から來たところの大切な思想である。儒教から來るものでもなければ佛教から來るものでもない、此の點は日本の文明を作る上に、現在及び將來に深く關係を有つて居て、何時までも棄てることの出来ぬものである。

如何程學問が進まうが、如何程思想が變化しやうが、此の建國の大理想を棄てるとか、御皇室の尊嚴を忘れるとか、國民的精神を輕んじたり、又は天佑保全と云ふ國民の觀念を棄ると云ふことは到底出來るものではない、是は日本にのみ限る永久不滅の思想である。さう云ふ點に於て神道の特色を見て置きたいと思ふのである。

信仰と満足生活

- (一) 現代と於ける信仰……………(二) 信仰の意義……………(三) 信は是れ大寶藏……………
- (四) 先づ信の根元に進め……………(五) 菩提樹下の法樂……………(六) 喜悅の力……………
- (七) 釋尊說法の精神……………(八) 佛とは何ぞ……………(九) 佛滅後の信仰……………
- (一〇) 教法尊重の信仰……………(一一) 本佛の信仰と満足生活……………

一 現代に於ける信仰問題

抑々今日の佛教の信仰状態と云ふものは、非常に多岐散漫になつて居るので、殆んど其適從する所を知らないと云つても宜い位である。何が佛教の信仰かと尋ねられても、答へる事が出来ない程紛亂錯雜して居るのである。それは佛典の上に於ても數多くの經典あつて其間には種々様々の信仰がある様に見えるのである。それが又長い歴史を経て、其間に幾多の高僧出で、夫々教を説き、又間違つた考を抱ける人も現れて種々の事を述べ、又他の思想が混入して佛教ならざるものが佛教として認められて居るものもあり、或は多くの國々を渡つて行く間には、又各その國民性に從つて信仰の變化を起すと云ふ様な事もあるから、佛教の信仰とは果して何んであるか判らない様になつて来る。然し乍ら佛教を復活して將來日本の爲めに、又世界文明の爲めに大いに貢献せんとするに就いては、今日の様な紛亂錯雜なものではならぬと云ふ事は今更言を要しな

い次第である。されば何人でも佛教の爲めに大いに貢献せんと云ふ志を起すと同時に、佛教の信仰の紛亂を匡正しやうと云ふ考へを持たねばならぬと思ふ、かゝる意味で以下卑見を述べて見たいと思ふ。

二 信仰の意義

扱て此の信仰と云ふ言葉は、常に往々佛教中の一部分としての言葉と認められて居る嫌があるやうに思ふ。例へば佛教の中で認められて居る觀念、法とか、座禪とかと云ふ様なことは信仰とは違ふ様に考へられて居る。其他種々の行をするに云ふ様な事、例へば眞言などで様々の形式をやる所謂秘印を結ぶとか、其他様々の道具立てをする、此等は皆信仰の外であると稱するものがある。それから又佛教の哲理である。佛教には大いに深い哲學的眞理と云ふものを包含し

て居る。帝國大學にも佛敎の敎理を研究する爲めに、東洋哲學と云ふ講座が設けてある。即ち佛敎の敎理を哲學と呼んで居る。又眞如實相と云ふ様なことは、非常に深い高い、幽玄なる哲理であると言はれて居る。斯る智力的研究に屬する側は信仰でないと言ふ。又古い昔より出來て居る華嚴宗などは非常に深玄なる哲學的の敎理を説き、十玄六相と云ふ様な事を云ふ。或は天台に於いても一心三觀と云ふ様な事を説いて居るが、それは信仰の力では得られぬと云ふ。以上の如く哲理とか觀念とか云ふものは皆信仰でないと言ふ事になると、予の論せんとする信仰も唯世上にある信仰、佛敎中の一部分の信仰と云ふ事になるが、眞の意味の信仰は決して其様な狭いものではない。信仰と云ふものを其の様に狭く解するのが既に間違つて居る。由來佛敎と云ふものは種々様々な内容を具備して居るに相違ない。或は純粹な哲學風のものもあり、純粹の道德の様なもの

のも澤山あり、又それ所でなくもつと低い社會救濟の事業、或は病氣を治癒する醫術、看護術、其他建築の事、植物の事等、佛敎の中には殆んど社會に現れる事象の全部を包容して居るのであるからして、さう云ふ點より云へば信仰などと云ふ事も佛敎の一部であると云ふ様に考へられるけれども、それは佛敎に就いての見方が違つて居りはせぬかと思ふ。さう云ふ見方も出來ない事はないけれども、それでは佛敎を見る上に於いて既に一つの誤解を生じて居るのである。何故かと云ふに佛敎の信仰と云ふものの中には、座禪でも、眞理でも、哲學でも皆之を包容して居るのである。

それは種々な方面より論證する事が出来る。例へば華嚴經には多くの眞理が説かれてある此の華嚴經を中心として出來て居る華嚴宗の有様はどうかと云ふに宗敎の信仰としては既に滅びて仕舞つて居る。華嚴の經典はあれども信仰

はない。そこで今華嚴經を取つて研究してみると、華嚴經は決して哲學ではない、その哲學の分子は佛教の信仰の内容に包含されて居る哲理であつて決して宗教の外に出た一種の哲學と云ふものがあるのではない。此事は華嚴經の全部に就いて論證する事が出来る。華嚴經の中には有難い教が澤山説かれてある。信仰が説かれてある。其信仰の中に理義が説明されて居る。實に華嚴經は始めから終りまで貫いて大なる宗教である。今の華嚴宗が哲理眞理のみに傾いて、信仰を失ひ、華嚴宗が日本に於いて既に滅亡せるが如き有様を示してゐるは、華嚴宗の宗徒が大なる誤解に陥つた結果であつて、偉大なる經典、偉大なる宗教があるにも拘らず、遂に一片の學理哲理と化して滅びた。華嚴經の信仰はかくして消滅した。但し華嚴經そのものは永久に滅びないものである。尊き人生の光りとして永遠に存続すべきものである。その信仰の内容の滅びたるは是れ信仰

を振作興起する偉人傑僧が現れなかつたからである。法華經に於ても亦然り。唯天台宗と云ふ智的宗教あるのみで、若し日蓮上人が出なかつたならば必ずや華嚴と同一運命に終つたであらう。日蓮上人の思想即ち日蓮主義は、法華經の中から啓發せられたものである。而して天台が解釋したる如き觀念智力的なるものが法華經の本意か、或は日蓮主義の様な信仰が法華經の眼目かと云ふに、日蓮主義が法華經の正面であつて、天台は結局法華經の側面である。即ち天台は唯半面を見て全體を見ない所の思想から起つたものであると言はなければならぬ。要するに天台は只智力的に法華經を解したものであつて、法華經に徹底して居ないと言つて宜いと思ふ。禪宗に於いても矢張り誤解があると思ふ。元來禪宗は楞伽經、首楞嚴經、維摩經に基いて居る。所が其等の經典を仔細に研究して見れば、楞伽經でも首楞嚴經でも皆立派な宗教である。決して冷やか

な真理見たいなことばかり説いてあるものではない。其中には實に立派な宗教的要素が多々含有されて居る。理論は其一部に究明されてあるのに過ぎないのである。

三 信は是れ大寶藏

信仰は佛教の一部分であるといふ様な考へは餘程古い時代から間違つて居る所であらうと思ふ。然るに眞の意味の信仰は佛教に對する思想の全體を指すのである。佛教の幽玄なる哲理を研究するに方つても、信仰をはなれて佛教の哲學を窺ふのでなく、佛教の道徳を見んとしても、佛教の信仰と云ふものゝ中に包容されて居るものとして道徳を見んとするのが予の考へである。一寸妙な考へ様の様にも見えるかも知れませぬが、一切のものは信仰と云ふものゝ中に入つて

居ると思ふ。即ち分裂して居る信仰が能く統歸されるかどうかと云ふ大きな問題である。私は深く之を信じて話を進めて行きたいと思ふ。そこで先づ華嚴經を引いて之を證明して見たいと思ふ。

華嚴經は或る一部に於ては盛んに哲學的事を説いて居るものには相違ないけれども、そののみを見ては未だ華嚴經の局部に屬するものであつて、全體は大なる宗教である。大なる信仰である。華嚴經はその表題からして既に大方廣佛華嚴經とある。是れが即ち宗教である。大方廣佛とは云ふ迄もなく大きな佛、偉大なる佛、即ち智慧でも活動でも何んでも非常に立派だと云ふ事である。華嚴を讀まざれば佛の人格の豊富なる事を知るを得ずと云ふ様な事を能く申しませんが、實に佛と云ふものは智慧でも、慈悲でも、活動でも非常なものであると云ふ事を説いて居る御經である。之れを純粹な哲學、冷やかな哲理の原理原則

を説いたのであると云ふ様に考へると、標題から判らないことになるのである。華嚴には六十華嚴、八十華嚴があるが、六十華嚴の中に淨行品と云ふのがあつた。淨行と云ふは淨き修行と云ふ意味である。つまり佛教に於ける一切の宗教的行動を總括して淨行と云ふ言葉を用ゐるのである。そこで佛教には種々なる行があるけれども、其行の中心たるべきものは何處から起つて來るかと思ふ事を論じて居る。さうして非常に立派な堂々たる論説である。其の第七に信仰の價値の大なることを頗る良く説明して、總て信仰を第一とせねばならぬことを力説し中に

『信是寶藏第一法』

と云ふことがある。佛法の尊き教を、八萬寶藏の藏に仕舞つて置く。さうして非常に多くの貴重なものがあるけれども、其多くの寶の中に於いて信仰と云ふ

ものが一番大切なものであると云ふ意味である。實に適切な言葉である。それから何故信がそれ程尊いかと言へば

『信是爲道元功德母』

である。信仰が一番大切である。信仰が根本になつて有らゆる道徳が發生するものである。又功德も信仰が元になつて起るものである。

『增長一切諸教法』

斯て一切の諸の教法を増長せしめ、宗教と教育と調和する事が出來、宗教と道徳と調和する事が出來る。宗教を盛んにするは國家を發達せしむる所以である。

それからさう云ふ風に信仰の偉大なる事を逐一説明して、信仰さへしたならば、それを出發點として智慧と云ふものも現れて來る。

『信於法門無障礙』

佛教の一切の事を法門と云ふ、總ての佛教の教義學說一切が法門である。信を元にしたならば如何なる面倒な、むづかしい事でも判る。信を外にしては何も分らないのである。予は唯斯ふ云ふ言葉があるからと云つて引用する譯ではない。實際是は眞理であつて、信仰の價値の偉大なる事を能く道破して居ると思ふのである。日蓮上人も諸法實相鈔の結文に、

『行學の二道は信心より起る』

と仰せられて居る。行學とは云ふ迄もなく佛教を實行する事、佛教を學び知る事である。信仰と云ふ言葉の中には行も學も包括して説明し得らるゝものである。

四 先づ信の根源に進め

以上述べたる如く、信仰の問題を見るに一般世間が以て冷やかなる哲學風の教であるかの如くに思つて居たり、或は斯う云ふ風である。是は一ヶ所であるが、全部此思想で貫いて居る。又華嚴經入法界品二十卷と云ふ非常に長いものがある。これは善財童子と云ふ一人の道を求むるに非常に熱心な人があつて、人を訪ねては佛の教と云ふものは如何なるものなるかを尋ね廻つた。で又其人から誰々の所へ行つてお聞きなさいと云つて知人を紹介して貰ふ。又其人から先きの人へ紹介して貰ふと云ふ様に、次から次へと此善財童子が教を求め話を聞いた人が百人以上もありまして、非常に熱心に聞いて歩いたものである。而して其一人一人に就いて聞いた話は、先きに遇つた人の教へてゐない事ばかりで、つ

まり百人以上の異つた人に異つた話ばかり聞いて廻つた譯であるが、其百人以上の人々は、一貫して一つの事を説明して居ると云ふ事に歸着して居る。これは何かと云ふに信仰である。一人一人が何れも異つた事を教へて居るに拘はらず、之を總括して見ると一切の根源は信に在りと云ふ事を説いて居る。法華經に於いても亦然りである。是れは法華經の中で誰も承知して居る事であるが彼の舍利弗、智恵第一の舍利弗と稱せられて居る位の舍利弗であるが、然も彼が悟りを許された時に、釋迦牟尼が汝が覺つたのは

『以レ信得レ入。非ニ已知分』

と言つて居る。是は飽く迄佛教は信仰でなければならぬと云ふ證據である。佛教の哲理を名づけて東洋哲學と稱しても宜しいかも知れませぬが、佛教は全然さう云ふ冷やかな哲學であると思ふならば、それは大なる間違ひであると

云はなければならぬ。如何なる高い深い理屈が説いてあつても、之を下から云へば信仰、上から云へば佛の偉大なる精神人格即ち慈悲に蔽はれて居るものである。つまり佛の偉大なる慈悲を以て眞理を包んで居るものであると思ふ。以上は一切が信仰の中に入ると云ふ例を述べたのである。以下少しく自分の考へを述べて見たいと思ふ。

五 菩提樹下の法樂

抑佛教の信仰は何處から起つて、どう云ふ具合に分裂して、どう云ふ所に納りがつくかと云ふ事を一つ概観して見たいと思ふ。佛教の出發點、即ち信仰の源流、源泉はどこにあるかと云ふに、釋迦牟尼佛が彼の菩提樹下に坐して正覺を成就した所が佛教發現の源である。若し悉達太子が正覺を成就しなかつたな

らば、佛教と云ふものは起らない。佛教が起らないと同時に、佛教の信仰は世界にないものである。此釋尊の正覺は佛教信仰の基本である。覺ありて教となり、教ありて信仰となる。覺と云ふものはどう云ふものであるかと云ふ事を最初に考へて置いたならば、餘程此信仰に就いての話の纏りが宜いだらうと思ふ。そこで釋尊の悟りを智恵と解するは大變な間違である。哲學者が覺つたならば、原理を發見した時に覺ると云ふのも宜いかも知れないが、釋尊に今の哲學者の考へる様な冷やかな原理を自分の智力で覺つたのと同じとは言へない。釋尊の覺り方は何方かと云ふと音樂でもやるとか、美しい花でも見るとかと云ふ様な側のもの、言はゞ法悦であつて、清い淨い精神の悦が充ち満ちて居るものである。自分では即ち法樂と云つて居る。道に合したる所の淨い樂しみである。法樂が即ち佛の覺りである。唯勢力で眞理を認めたと云ふのではない、眞理を認

めると同時に非常に悦びに充ち溢れて居るのである。是が上に向つては全宇宙と融合し、下に向つては慈悲と云ふ様な優しいものとして現れる。此の悦びを如何にして分つべきかと云ふ心が非常に強、現れて居る。無論此の中には佛の樂しみとその智恵があるのである、馬鹿では救へないから智力もあるが、眞理を智力で覺つて、智力を人へ與へんとするものではない。宇宙の實相を看破して大なる悦を感じ、大なる慈悲を以て之を下に及ぼさんとするものに外ならぬ。其智力を表に出さない意味合を妙覺と云ふ。妙覺と云ふのは何んとも言へない所の覺りである。此事は法華經にも能く現れて居るが、其他一切經を通じて佛の覺つた時のことは法樂、妙覺と云ふやうに現はれて居る。一つの例を擧ぐれば佛法行宗經の所説に於て、釋尊は出家して先づ跋伽婆仙人及阿羅々仙人に就いて解脱涅槃の道を求めた。阿羅々仙人は當時の第一流の哲學者で

あつた。併し釋尊はその學說に服する事が出来ず、阿羅々仙人の許を去つて、優婁頻螺村の一樹林、即ち苦行林に入つて六年の修行を積んだ。其行も哲學風ではなく、餘程愉快な態度で、宇宙を観察するに非常の悦びを以て見て居る。故に正覺の成るや菩提樹の下に七日七夜の間、飯も食せず何もしないで解脱の樂しみを持續して居つた。即ち觀喜觀樹である。三浦觀樹將軍が觀樹と名乗らるゝのも之から出た事であらうか。兎に角七日七夜の間、寝もせず飯も食せず何もしないで、全宇宙の喜びを我が身に集めた様な歡喜に満ち溢れて居られた。此の悦びを以て人生の有ゆる煩悶苦痛を救はなければならぬと云ふので法を説かれたのである。斯の如く喜びより出發して來た佛教であるからして、佛敎の信仰と云ふものは理屈で以て成程と云ふ様に人を説得するものでなく、心よりの喜びに満ち溢れしむるものである。との御經を繙いても、釋尊の説法

を聞いて御弟子が退散する時には、ア、今の御説教の理屈はよかつた、成程さうだと感じて居るのではなく、心の奥底から喜びを漲らせて、歡喜に満ちて禮をなして退きぬと、喜んで散會して居る。之れに依つて見ても即ち釋尊の教を説くや、決して哲學でもなく、又華嚴宗の十玄六相と云ふが如き、聞けば聞く程頭がうづくると云ふ様なものではなかつたと云ふ事が能く判ることと思ふ。法華經に於いてもさうである、歡喜踊躍と云ふ有様である。壽量品を聞いた時にも、矢張り彌勒が歡喜に満ちると云ふことを言つて居る。一番最後に總てが退く時にも矢張り

『一切大會、皆大歡喜、覺持佛語、作禮而去』

とある。是れ即ち佛教が喜びを生ずる宗教でなければならぬ所以である。勿論眞理と云ふ側を逸する事は宜しくないけれども、又眞理哲理の方面のみを知

つて哲學的にばかり佛教を見るは大なる間違であると云はねばならぬ。

六 喜悅の力

畢竟佛教は人生に喜びを興へるものである。喜びは即ち活動である。喜びは人間の元氣活力を復活せしむるものである。人が疲勞する。その疲勞より復活せしむるものは喜びある。喜びがあれば正義、名節、忠義と云ふ様な事を全うする事が出来る。欣然として國事に變れることを喜び、身を殺して仁を爲すは、是れ正義の亂さるゝを喜ばずして、身を殺す事を喜ぶものである。欣然として命を鴻毛の輕きに比すと云ふ事が、軍人の精神教育の奥義である。昔の忠臣の云つて居る言葉に、大義をして千歳に傳へしめば一死論するに足らずと云ふ事がある。此日本の大義忠節を重んずるは道德觀念を益々發揚する事が出来るな

らば、自分の死は何んでもないと云ふ事である。生命を全うするよりも大義を擁護すると云ふ事が喜ばしいと云ふ事であると思ふ。此意味を良く考へれば又道德修養上の原則になるものであると思ふ。例へば論語の初めに

『子曰學而時習之不亦樂乎、有朋自遠方來不亦樂乎』

とある。樂しからずや、喜ばしからずやと云ふ事は矢張り道德修養の根本を爲す事である。孔子の愉悅に満てる態度を論語に於いて形容して、

『子之燕居申申如也、天々如也』

と言つて居る。恰も桃の花の天々如たるが如く悠揚迫らず、愉悅に満てりと云ふのであらうと思ふ。それから孔子が或時集つて居る弟子達に向ひ、お前達はどう云ふものになりたいか、どう云ふ事をしたいか、欲する所を言へと云つた時、外の弟子達は大臣になりたいとか、知事になりたいとか、勝手な事を述

べたが、唯曾點のみは

『童子六七人、浴三平所、風三乎舞雩、詠而歸』

即ち子供を五六人連れて風景の宜い所へ行つて、歌でも詠つて悠々と遊んで見たいと云つた。この時孔子は

『俺もそれが一番賛成だ』

と云つたと云ふ事がある。さう云ふ所を見ると、唯遊んで居る事ばかりが良いと云ふ譯ではないが、要するに道德の力、宗教の力と云ふものは喜びに出でなければならぬと思ふ。故にさう云ふ方から考へて行くと、釋迦牟尼の悟つた時の精神は喜びであるからして、矢張り一切經に現れて居る事も喜びである。釋尊は一代の間覺悟する事なしと御經に書いてある。顔をしかめることがなかつたと云ふ、人に遭ふに決して顔をしかめる様なことをしなかつと見える。故に釋

尊ならぬものも

『衆心悅す』と法華經に書いてある様に總て喜びに満ち溢れたのである。

七 釋尊の説法の精神

斯の如く佛教の源泉は釋尊の正覺に發し、其正覺は矢張り喜びの心に出るのであるから、従つて釋尊の衆生を教化せられた目的も、先づ歡喜の心を起さしむると云ふ事に歸着するであらうと思ふ。是は法華經の壽量品に書いてあるが、

『發觀喜心』

とある。或は一方から云へば、歡喜と云ふ代りに施無畏と云ふこともある。今の佛教徒は書物を読んで居るけれども、勇氣もなく、生々した喜びもなく、

従つて活力の源は涸れ果てゝ居ると云ふ様な有様ではあるまいか。斯の如きは實に釋尊の世に出た趣意と全然逆行したものであると言はなければならぬ。さう云ふ態度は釋尊が初めから非難したのである。それから釋尊が法を説き始めた、今述べた様な態度で以て人生に光明を與へやうとて四諦の法を説いたのである。

苦——果

集——因

滅——果

道——因

向下的因果と、向上的因果を説いたのである。八正道と云ふ正しい道を示したのである。根本の奥深い面倒な事を云ふよりは、先づ實際に人生に打ち克つ

方法を教へたのである。此の苦しみの境界から脱し得ないものに對しては之を度する。それから安心を與へ、或は涅槃を與へ、以て人生を渡るに煩悶苦痛を去つて安心して不滅に行かなければならぬと云ふ事を説いた。茲には理屈もあるが之を要するに信仰である。

それから十二因縁を説き、六波羅密を説くにしても皆是れ道德的である。其道德も樂しからずや、悦ばしからずやと云ふ様な、道の上に安んじて、即ち樂しんで、其の道の中に生くると云ふ様なことを證明して居るものである。七日七夜喜びに満ちた精神を、靜かに樹下に座して持續したと云ふ様な歡喜を人に分つ爲めに、憍陳如等吾々に熱心に之を話す。五人とも大に歡喜して出家受戒して釋尊の御弟子になつた。五人の御弟子が出来て茲に始めて佛法僧の三寶が發現したのである、即ち三寶にも三通りの解釋があるけれども、尤も解り易い

のは、佛とは釋迦牟尼、法とは即ち釋尊の御説きになつた喜びの説法、僧とは釋尊の御弟子達の事である、廣くは現在の我々僧侶 尙ほもつと大きく云へば世界人類 悉く僧であると云ふ事が云ひ得るのである。此の關係を忘れてはならぬ、此の關係を忘れるが故に尊ぶべき佛や、法を粗略にするのである。是は矢張り法華經の方便品に説いてある事であるが、

『我れ智慧力を以て、衆生の性欲を知りて、方しく諸法を説き、皆歡喜する事を得せしむ』

と仰せられてある。即ち大慈悲の心を以て衆生を教へ、非常に喜びに満たさしむるのである。それから、

『五比丘の爲に説く、之を轉法輪と名く、即ち涅槃の音、及び阿羅漢、法僧差別の名あり』

とある。斯の如く、佛法僧と云ふ三寶の中の法は決して哲學の眞理でない。説法を通じて眞理を述べて居るが、決して冷やかな哲理ではない。之れを哲理、哲學と見るは誤りで、矢張り釋尊の説法である。それから後四十九年の間各所に於いて、數限りない説法をなし、有らゆるものを残らず教化し、種々様々なる説法をなされたけれども要するに此の一大精神を以て貫いて居ると云はなければならぬ。

八 佛とは何ぞ

それであるから先づ一切經の上に現れて居る思想を見れば、佛敎の信仰は三寶に歸依すると云ふ事になる。此の思想は小乘經に於いても、大乘經に於いても、法華經に於いても同じである。佛と法の尊き事は言はずもがな、僧は